4948 特11
526

文・内交・明治

清華園藏書

之下手人

春廼屋朧先生序

渡邊喜望戲著

No 6873

東京

團々社書店

特II
526

或造大車或捕蝶而
般計畫共殺野讀
來要覺校書學文有
吾人者法圖

丁亥小春
雨若老

雲の下手人序

老いては駝洒落におとがいをとき馬と聞
えし縢栗毛の逸物も今は十銭の價ひとお
ちぶれ古書架の蛛の巣まとぢられてのみ
嘶く世の中八笑人の好笑さも七偏人の狂
痴さも時の好みに後れては珍竹林とちゞ
こまりて七賢を氣取るもやくなしや嗚呼
一九逝き鯉丈過ぎて驥北の原はいざしら
ねど戯墨の肚はガランドウ歟またウマイ
作を出さゞるなり出る作もでる作も和洋
折衷の似而非料理フライにあらぬ未来ぱ
くめ佳人才子の附合せ政治出の皿々青味
なし爰も拔群出色の好笑き筆を操られし
は名は喧々と雑子町の團々珍閑社中ま於
て鳴りあたなべの望ぬし望といふ名に因
まれて歟道戯の道の衰へて薫りかへりし
苦蟲のお臍の藉をかへんといふ近おろ稀
なる望を起されチヨロ〳〵チヨツとなゞ

られし當世向の滑稽小説をかしといふはいふだけ野暮にて面白しなども蛇足なるべし何まもいはぬ明治の逸物評判千里に轟かん其ため先追ひハイヨー〳〵

丁亥の小春　　春のや主人臘述

目錄

號數	頁	題目
第壹回		親友旅館を訪ふ　蜘の巣世界に張らんとす　蜘の買ひ出し
		和尚の問答　古寺の混雜　猿野の思案
第貳回		散歩鬱を散ず　駕籠の間違ひ　指鑑に箝めらる
第三回		飼犬脛を嚙む　犬車の注文　府下に犬を飼る
第四回		出火の報再び燃立　湯上りの洋服　物干を見て危急を察る
第五回		機關の發動　發條梯子の廣告　校長の注文
第六回		礦石の發見　滝車の笑話　湯治中の逸興　洞を見て感を起す
		資金を豪商に謀る　發明の原理を語る　事務局の整頓　紳士花
		瓶を買ふ　洋服の好み　豪遊の計畫　七人の珍客　肴賣の滑稽
		書生の隱し藝　於蠱の演説　珍報猿野の胸を擊つ　不撓の精神

滑稽小説　雲の下手人

滑稽府痴族　自他樂坊著幷畫

第一回　親友旅館を訪ふ

思ふ事長し短し時辰儀の針分時も休まず進む世に合ふて時めく人も
あり合はで隱るゝ族もあり珍と褒め凡と貶るも皆ろれ〳〵の器量次
第嗚呼世の中は時計〳〵只その機關の裝置に依るのみと呟きながら
卷煙草を燕らせ柱の時計詠めながら机ヨ脊中倚り添ひて退屈の足踏
み伸ばす一人りの客はお手が鳴るかん田の片端エテ樂と俗に呼ぶ猿
樂町の旅人宿に八疊一ト間借り切りて閑暇に支體を持て餘す人なり
居間には赤い氈絨を鋪き詰め並より小高き書几を据ゑ側なる革提の
札を見れば名も町名に因み有る猿野千枝と記して有り書生ヨは
些と立揚れど左りとて官員らしき品格も見へず若ち入札にて品評し

たなら自稱紳士に落札やすべし少し光澤の付きたるべか〳〵小袖に白鼠色のヘコ帶を締めたるは妻君の無き證にやあらんまの人元

來近江の產まれて父を源五郎と云ふものなるが或る日源五郎よりの手紙を持ちこの旅宿を尋ね來りし若者は同じ滋賀縣の士族にて下田失策と云ふものなれば旅宿の下婢に案内させ久ぶりなる面會なれば暫し談話も途切れざりし猿野は父よりの手紙を開き讀み了り繰り返へし

猿野ハヽー委細この書面にて承知致した堂か貴公の大人より今度君の出京に就ては都ての事愚

生に相談ある樣ゝと御賴みありし趣なるが愚生も當地に友人なく心もとなく思ひ居りしが是から大きに力を得ました

下田イヤ猿野君ゝれは飛んだまと拙者て

ろ東西知らす新參もの委細は書面で御承知でせうが諸事何分御教示を煩はしとう存じます扨ゝれは左うゝまづ取敢へゞ僕の下宿を極めねばならぬが君宜しく周旋して呉れ給へぬか此家の内に明き間があらば猶妙なり君と同宿ならば萬事の都合申し分なしだがハヽヽヽ

猿野夫ア僕にも願ふ處と早速猿野は旅宿の主人に掛合ひしに明き間迚は別に無き由なれば

下田に向ひ

猿野　只今承はれば折惡く何の座鋪も塞つて有るとの事故貴公さへ御承知なれば當分の處ゐの一ト間に同宿さるゝも拙者に於ては構い申さぬ

下田　夫では堂の同宿を願ふことゝ仕ませう

と忽ち居處も極りたれば下田も安心して行李の内より着替への衣服など取出して暫時休息しでありけるが頓て猿野は下田に向ひ

猿野　君も出京さるゝ以上は何がな目的のある事ならんが堂云ふ事を目指し給ふか官途は既に人が充滿し商法は互ひに競爭の姿にて資本の薄きものは持堪へかねて終には閉店するが多數に居る世の中なれば我輩なども出京後既に兩三年を經るも殆ど無產の遊手漢と云はるゝも道理無きにあらずだが素より何時までも此有樣で遊んで居るべき筈もなければ種々に心を碎き居れど何が扨是はと云ふ旨い仕事もないもので是には殆ど當惑仕るテ僕も仕官を思ひ立てたのかた既に三、年人にも知らさず汲々として此事にのみ奔走し先から先に傳を求めろれには思はぬ交際も爲さねばならず大概今日の入用とする處は交際費のみの一方に嵩み借財の額の鰻升りは殆ど底止そる處を知らず頁し夫をも我慢するとした處が頼み置きたる人々の口氣を考へるにマンマと首尾よく拜命とまで事が運んでも僕が平素の心算とは大違ひで何んでも思た半分と

も云ひたいが十分一位或は夫迄にもむづかしさうな現時の相場ろの上何んに有り附くにも普通の學科は素よりの事横文も書き語學も一ト通りは遣らねばならず尤是等は堂やら斯うやら遣て扱けるとして見た處が肝心要のサラリーとのが勢が低くて引張り足りずイヤ難い事〳〵實に仕官の事アモー思ひ切りだ寧ろ僕ア今より氣を變へでての先き見込みある事業家となり自ら實際に當て利益を徐々に謀るとす。れは何ンの僅々數拾圓の金の爲腰を屈るの困難もなしだから仕官の事は斷念して一と事業起した方が近みちらしいト思ふテ

下田「アー左うとも〳〵僕なぞは全体仕官論は感服いたさん方だ。處で君の起す事業とは如何なる事か定て種々の計畫も就てある事でせう何んと及ばぞながら僕等も共に力を協はせ國益と云ふ程には至らずとも責めてはその片端なりとも盡力いたしたいもので御座るが何か名手段はあるまいの夫にしても今日我々一身上の土臺からして何ンとか方向を附けねばならず

根野「左れはろの事よくも君には言はれたり僕の見込みも是より段々れ話し申さんが及ばずながら君にも最前云はれし通り今まで私かに目論見たる種々の事業もろの成るか成らぬかは保證せねど爲すべき事は澤山に有り幸ひ君も出京ありて僕には翅を得たるも同樣この機を外して又いつの日歟時を得べきイデ奮發して近日の内に起業の第一着の手續きに取掛るてとゝ決心しませう

却説起業の第一着とするは外でもないが我邦種々の物產あるもいまだ蠶の糸に勝れるものあるを聞かず故に近來ます〳〵

養蠶の業諸方に起り年々輸出の額さへ少小ならざれど扨この事業の手の掛りて六ツケしきは今更云ふまでも無けれど季候の和順なる年は格別少し寒暖不同なる年に逢へば不慮の損失を招くとあるは常に事業家の困難とする處にて斯る氣むつかしき蠶を養ひ立るは何んの事はない酒の上の惡き癖ある客人を旨く擬して無事無難に開きとするの感ありてなか〳〵容易なる仕事にあらず左りとて外には斯る美しき糸を出そものゝあらざるは是非なきことにころあれ是に就き近來僕の頻りに苦心して居る事のあるのだが开は斯う云ふ一件なり話せば長いが一寸まづかい摘んだ處を申せば多くの蜘を飼ひ立てその蜘の巣の糸を以て蠶の糸に代用仕やうと云ふことなり我輩子供の時に蜘の子を弄びて覺ゆもあるが蜘は一体蠶のやうに

其性質れとなしきものには有らざるもろの代りには飼養法に於ても蠶の如くに氣むづかしき事も有るまじく只打棄て置ても成長して困る程ならんと思はるゝは平日軒先にぶら下り居る蜘を見ても知らるゝなり左うしてろの出す處の糸に就ては豫て聞くリユーマー氏なるの説に依りても蠶の糸は二グレインの半の重量を掛け蜘の糸は僅劣りて二グレインの目方に堪ゆる割合なりとか左れば其糸の丈夫さに於て幾分か劣る處は有りとするもその割合に多くの糸線を縷合する事にすれば必蠶の糸にも勝る程なる糸を製し出さんは難きにあらざるの時にてろ世界の絹布は償うち無きものとなり蜘の糸の織物に莫大なる利益をば見ざらんとするも難かるべしサ开して彌該事業の目途が立ちし上は盛大に成すことは勿論なれどろれには非

常なる資本の額も要する譯だからの資本の出處は充分に見當も就て居ると申すは外でもなく君にもよく知て居らるゝ彼の同縣人なる豪商今田久平氏だがあれは。チヨン髷でてろあれ今度の海防費にも魁けて多額の獻金などして大きに同縣人の中にも名望を得ました彼の男は拙者の伯父でもあるし旁本人の話にも目途の立ちたる生產事業ならば資本は幾らでも一手に引受けても宜しとは豫て彼の男より聞く處なれば彼に話せば潔く引受るならんが左うさへ行けば所謂智識と金と和合したるものにて最奇妙ろの盛大は期して待つべしだが併しろこに一ッの心配のあるはなまじい手始に失策を仕て見せる樣な事が有ては僕の信任をも失ひ後來業を起すの妨げともなるがゆゑまづてゝの處では專ら費用を要さぬ仕組に成して箇樣〳〵

と打合せたるに下田も至極賛成なれば彌ゝ此事業に着手する事とは成したり

後野夫に就き蜘の飼養法を試るにはまづ手始に多くの蜘を買集めねばならぬが蜘の多く有りさうなる場所とするは如何なる所ならん歟思ふに大きな寺院なんぞは近年住僧も少く自ら修覆は勿論掃除さへ屆ぬ處より夥多の蜘を飼ひ置くと云ふにはあらざるも定めし明き間の隅〳〵には蜘の巢の張詰めて有るに相違なしされば年〻蜘の數は殖るとも減るとは思はれずなんでも是は重に寺を目掛けて買集めるに如くはなし併し寺院とは云ふものゝ御維新後は何處の寺も持堪の出來ぬ故か本堂などは賣却したるが多くてホンの伽籃堂と成り居れば或は蜘さへ棲ぬ次第かも知れぬが眞逆に廣き東京の事なれば斯る寺院

ばかりにてもあるまじければ府下の寺々に廣く買集るが宜しからん

と彌〻評議も決したれば早速蚊屋の切れにて三ッ四ッの大蚊を拵へ首には錢財布をブラ提げて翌朝早くより兩人はろれ〻〻方角を分けて旅宿を立出府下にて寺院の數多しとする下谷淺草邊をば經巡りつゝ

猿野「へー蜘は御座い蜘のれ拂ひは御座いませんか蜘屋で御座い蜘の御拂ひは御座いませんか

と呼び歩行けば塲末の古寺などにては歡んで賣るものもあるゆゑ最前の見込み少しも違はずと猿野はまず〻〻得意となりて聲を張り揚げ

猿野「へー蜘は御座い蜘屋で御座い

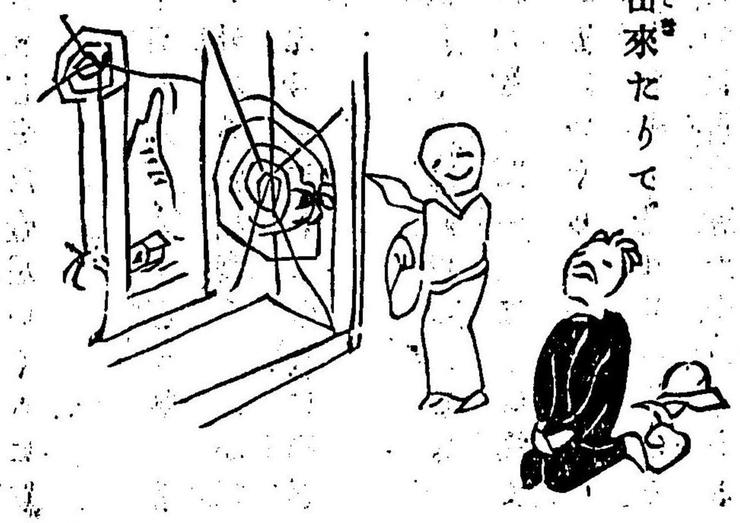
と呼び歩行けば又〻向ふの小寺より和尚出來たりて

僧「ナイ〻〻蜘屋〻〻

蜘「へー〻〻有難う御座い

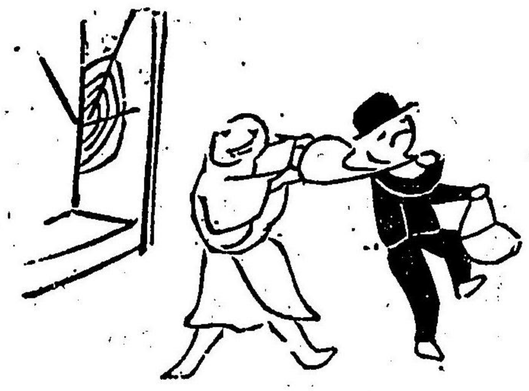
煩冠りを取ながら腰を屈めて寺へ這入る

僧「蜘屋さん己らの處の蜘は他の家の蜘のやうに壹年子でなく皆な三年子四年子だから大分よく肥つて居るが壹疋何の位なら買ひますか餘んまり價にならぬやうなら賣るのは見合せて是れ迄の通り飼て置く積



りだが隨分奮發してよい價に買て行ッし堂だ壹疋いくらに買ふエ

蜘や「左やうで御座い升なんか よく肥て居ても斯ういふもので御座い升から壹疋幾らと云ふ譯には申し上げられません壹束に付て壹錢に願ひませう



蚊「ナニ馬鹿な事を云たもんだ此位の大きさの飯鮹を買て見ても知れたもんだ飯鮹なら新場で大かた壹錢に四はいか五はいぐらゐの直打は大丈夫だソレ其處の床の間を覗て見なせへ彼の蜘なんざア己らの大事な蜘だが彼ア大かた掛目五六十目もあるだらうと思ふ若しなんなら軍鷄のやうゴ目方で極てもいゝが

目方なら貫で幾らに買ふか

蜘や「左やうで御座いますまだ問屋の方で貫の相場が立ちませんからいゝゝゝゝ

蚊「れ汝は氣樂な男だ斯う遣て毎日蜘を買て歩行きア立派な蜘買ひ商人ぢやアねへかうれに相場が知れるの知れねへノなんテろんな間抜けがあるもんか鷄卵を買ても知れたもんだ壹束幾らと極うた代物なら貫ぢやア幾らと極つて居るぢやねへかと云はれて蜘屋は心の中に思ふやうてんな功者な坊主に出喰はしちやア迚も叶はぬから早く尻を端折るゴ如ド

蜘や「左うかも存ドませんが何分問屋の方が左樣參りませんから堂か大小ナッ取りで壹束壹錢で宜しくは願ひませう夫で直段が御氣に入らずば他の蜘屋をれ當り下ださいまし

と云切て立出んとすれば和尚は賣りはぐつては大變と出行く蜘屋を無理に引留め

僧「チイ〳〵蜘屋〳〵ろんな逸酷は云はねエもんだ夫ぢやあろの直で賣ると極めやうが成丈け中で小さゝうなのを持て行きなせへよしか〳〵

蜘ヤ「ヘイ有難う御座います

と蜘屋は用意したる玩弄物の金魚の叉手を取出し買取りたる蜘を捕へんと本堂の方に至り見れば何處も彼處も蜘の巣だらけにて豫ての推量にも違はず物凄きまで荒れ果て脱落たる朱塗りの護摩段に晝鼠の走るさまを見れば頗豪阿沙梨を思ひ出し高麗縁の畳の透間に蜻蛉の蹤を振るは拂鬚を氣取る歟と思はれ正面の小高き處には古く煤ゆりたる木像なるあり片脇に木製の燭臺は殘り居れど花瓶その外金具

が頓て

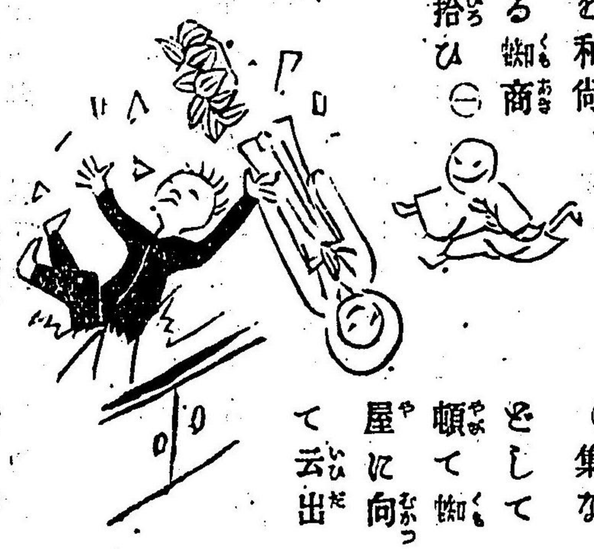
の見當らぬは遠方に賣拂たものと見なたり都て見渡した處いつの世に掃除せしものにやと人手の少きが思ひ遣られて哀れにも見なたるころ屈竟なる蜘の栖居ならめ成程和尚の云ひし通り掛目五十目はおろか七八十目も百目もあらん迄覺しき大きな蜘のこゝかしこに這ひ廻るを見認めたれば扨ころ全体を傷ぬやう生捕らんものと佛段に這ひ上りて蜘を追廻はす途たん根太板は雨漏りに朽ち損したるものにやガバと崩れて落ちしと見る間に蜘屋の尻は縁の下に

蜘ヤ「ヨシ〳〵此處ちの隅〳〵

ど籍を移したるまの響ゴ正面の佛像は高座より轉げ落ちたるが是も永の年月雨漏りに朽ちてや有りけん尊像の五體の繼ぎ目破落く〳〵となりて高座の下に飛び散りたるこの物音を和尚は聞附け走せ來たりまづ根太板に箝りたる蜘商人を助け揚げ離れ〳〵に成りたる佛體を拾ひ㊀集なすやう

㊁

價「己れはナ〳〵何事を爲す積りゾ足下に賣拂ひたる蜘の進退は足下ゴ任す處なるも何故斯る亂暴なる所行に及ひしゾ剩へ其上加之此本尊と三十番神は恭くも日朗上人の御作に係り日本全國他に比類の無きものなるに無慙にも斯く破



㊀

どして頓て蜘屋に向て云出

壞したるは何事ゾ堂守りたる當寺住職の拙僧に於て決して許すべき事件にあらねば損害要償の件を認へ出づべしろれとも足下が許多の金圓を出してこの損害を償ふかサア〳〵〳〵堂だソ〳〵認へやうか償ふかサア〳〵〳〵と詰問すれば蜘屋も氣早き方なればなか〳〵黙て引込んでは居らず

蜘「コリヤ貴僧は何を云はるゝゾ商人などゝ侮て亂暴せし覺えもない我身に向て無法の云分損害要償とは何事ゾこの損害は抑誰が引起せし歟貴僧自ら本堂の修復を怠り所く雨漏りに朽ち損じて疊に代へたる莚さへ破れかぶれト拾て置きてなんゾ根太板のみ朽ちざるを保證するを得んや左れは今この損害を發したるは我身

にあるかは知らざれど原因は貴僧の釀す處なればこの損害は貴僧自身に向ひて要償をるは御勝手次第我々に於て決して聞くべき限りにあらず

と大音揚げて述立るを蔭に聞き居し小坊主は大事件ころ出來仕つれと遽しく表へ駈け出し門前の交番所に至りて事の次第を告げたるにぞ何事ならんと壹人の巡査出張して一應双方取糺して見れは全く猿野が亂妨の所行に及びたるにもあらぬ事が分りたれば双方へ說諭を加へての塲は無難に事濟みとなり猿野は虎口を逃れし心地にてソコ〳〵に暇を告げて引取しが流石は蜘屋の商賣がら迚この間始終蜘の襲をば手に放さず宿所へ歸り來たりしに下田も同じ刻限に蜘の買集めより歸

り來りしが此日兩人して買ひ入たる蜘の惣高は二タ口合して三千五百卅疋となる勘定にて猿野は己れの買來りたる蜘をば襲より出さんとしたるにては如何に蜘はいづれも腹部を嚙み破りて死んで有りければ驚き呆れる側に居合はせ下田も同じく己れの襲の口を明ければこれも多分は腹を破りてありける故兩人顏を見合せて暫しは言葉もなかりけり元來蜘の性質は猛烈にしてなか〳〵蠶のやうに温柔らざれば迚も蠶の扱ひにては飼はれぬト云ふ事を兩人はこの時始めて發明し

たまゝ蠢の中に生き殘りたる二疋の蜘を取出して試みても蜘は忽ち決鬪の振舞を始めて敵手の倒れるに至らざる間は止めるも聞かず喰合ひを爲す程の勢ひなるゆゑ是にて多くの蜘の損じたるならんと云ふ事が明かに分り猿野は腕を組みて暫く思案に時を移せしが稍ありて閉ぢたる眼をばパッチりと開き

猿野　アー下田君〳〵是ア蜘は迚も行かぬワ。〳〵よしや行くと仕て見た處が第一にまづ此飼ひ方に餘ッ程工風を凝らさなけりやア物にならぬワ

下田　ういつア困たナ今から君が工風を凝らし始めた處がいつ頃その工風の凝り上るト云ふ見極めも無い事にペン〳〵と貴重な

月日を待ては居られぬ是ア何んとか外に河岸を變へるより名策は有るめへ开して綏るりと考へた方が然るべしだ

猿野　夫も左うだナ蜘の飼ひ方は扨置て蜘の買集め方に奔走するばかりもなか〳〵以て困難な話しだから

下田　ハヽア這奴ア隨分詰らなかつたナ蜘を抓む話したア本統に此事だア

此時猿野は腹いせに取敢へず一首

（猿野思案の肖像）

蜘の糸の細きものでも遣ひ切り
くやし蜘あり悲し蜘あり
と口ずさめば下田も續て
蜘はさて置て事業の失敗に
われも自腹を切らずべ成るまい

第貳回　散歩鬱を散ず

猿野は豫て計畫爲したる起業の第一着も是にて滯り無く失敗とは成りたれど初より玆に注意も仕たる事故伯父に資本の出金も賴まねば今度の失敗は人にも知られず悉皆自分の損耗にて濟ませたれども多分の金と云ふにも有らねば只自業自得と諦めては見ても心の中何とあく面白からず日々考へてのみ居たりけるが思ひ返へせば下田もての頃出京せし已來種々の仕事に奔走させしも事の全く手違ひよりろの報酬さへも心に任かせず彼の思ふ處をも斟酌し一日彼と同道して氣晴しながら散歩にでも出掛けんと思ひ立翌朝早く朝飯を仕舞ひて下田を誘引ひて近傍の九段坂靖國神社を始とし已れは土地案内の事なれば眞先に進みつゝ此處は某氏の官邸なり彼處は近來出來た會社なりと指さし示して話し合ふこの時脇の横丁より息勢切て昇き來る

駕籠を見下田は除けてこれを行過ぎ小聲に成て猿野に向ひ

下田ナント東京と云ふ處は廣いもんだ私の田舍抔ちやア最う遠ヂに昔の駕籠などに乘るものア壹人もないが東京は田舍とも違ひ格別早く開けて居るゆゑあんな駕籠なと見掛る事ア夢にも有まいと思の外多い人のろの中にやア隨分毛色の變たものもあると見ねる

と不審らしく話し掛けれは

猿野イヤあれはナ有名な醫者さまで駕籠の醫者さまとさへ云へは誰知らぬものもないくらゐだ

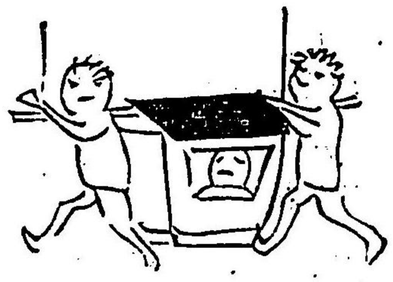
下田ハヽア夫ちやア中の人よりア駕籠の方が名高いのだから駕籠

の醫者さまと云ふたより醫者の駕籠さまト云ふた方が分りが宜さゝうだハヽヽヽ

猿野ナニ飛んだ事を云ふ男だ駕籠に直打ちが有るもんじやアねへ乘て居る人に直打があるのだから夫で名高いのだワイ

下田夫でも駕籠を止めて仕舞て世間有り來りの人力車に乘て歩行たら誰も知るものア有リア仕めへ

猿野ろんなれ汝のやうな事を云ちやア話しが出來ねへと云つゝ町〻をブラ附内も下田は目に見るものが珍しき故町の兩側に目を配るこの時風と時計師の店を覗きながら四五間も通り過たる折思ふやう今日は未明に起出て下町見物に出掛けたのでまだ左程長くも掛らぬト思ふ間にモーコレ午後十二時過き一時近くに成とは驚き



山椒の木道理で滅法腹が北山と心の内ゑは思ふても自分の懐中は無一物ゆゑ只猿野をば命の綱と頼みになし下田は猿野を呼び掛けて

下田モー彼是一時になるが君は些も腹は減らぬかエ

猿野何んだ一時だとエ何を君アとやけた事を云ふ今旅宿を出たばかりでまだ八時にも成りやア仕ねへに氣味の悪い事を云ふ男だ

下田夫でも今時計屋の店で大きな六角時計を見て來たが夫ア最う慥に一時の處に劍先が向て居たから何處か牛肉店へでも這入込んぢやア堂かト一寸忠告して見たものサ

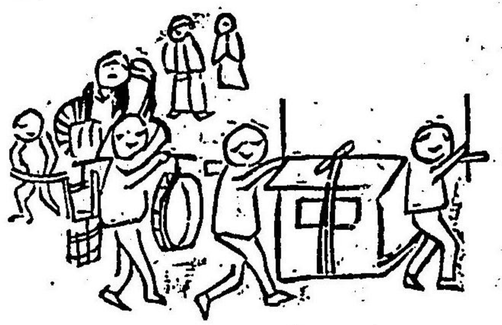
猿野ナニ君夫ア時計師へ修覆に來た時計でろの劍は大かたいつ迄も一時の處に立止て居るのに違へねへ困る事を云たもんだ若し夫を嘘だト思ふなら最う一遍行て見なせへ

下田チー夫ぢやア己らの腹の減たと思たのも減たのぢやア無つたかイ

猿野エー夫アれ汝の腹の時計の彈機が悪く成たのだらう

下田ウンニヤ今朝は旅宿で紫蘇も喰はせなかつたが

と手を拍て笑ふ内向ふの横丁より一ト群れの人が出來たり中央には一挺の駕籠を舁きたるを早くも目附け



下田「ホラ〳〵又先刻の例の有名な醫者さまが御座たゞ成程時候がら所〳〵に病人があると見えるが醫者さまもなか〳〵忙いと云ふを聞て猿野は吹出し

猿野「コラ〳〵下田靜かに〳〵何をれ汝は云ふのだ彼ア駕籠は駕籠に違ひはないが例の醫者さまの駕籠ぢやアねい葬式の駕籠だワ能く見るがいゝやア其證據にやア後トから盥を擔で行くぢやアねへか

下田「左うサ己ア又盥を持て行くから彼の醫者さまア產婆も兼るのかと思たア

とて大笑ひをなしたり斯くて猿野と下田は町々を經巡りとほ〳〵銀座の煉瓦街にまで來り或る西洋小間物店に立入り彼れや是れやと種々の品物を冷やかしたる末宜き序なりとや思ひけん猿野は指に箝めたる指輪を取りて亭主の前に差出し

猿野「何んとこの指輪を拂ひたいのだが幾らぐらねなら引取りますか

亭主「へー旦那是ア壹圓五拾錢程で御座り升併し夫は手前方へ引取直段と申すでは御座いませんホンのれ直打の處を申し上げたので是非手前へ引取り升のではろの內又幾分かれ安くなり升夫もこの品は手前方で差上たれ品故に外々から見外ト餘程れ直段を宜く申上たので御座い升全體銀臺へ色硝子を箝たものですから左うたんとのお直打は御座いません

猿野「エナニ馬鹿を云ふうんな安價物たア丸で品が違ふ僕のは餘ッ程高價品だ

此時下田は側に聞き居たりしが猿野に向ひ

下田「君ろんな高價いものを二束三文に賣て仕舞ふ事アねへ止し給へ〳〵

と洋杖を手に取直しズン〳〵店先へ出て行くゆゑ猿野もソコ〳〵にして店を立出で下田に追ひ付く

下田「君ろの指輪は一體何處で買たんだ

猿野「ナニこの品の來歴を話せば隨分長い事ヨ全體僕め知てるものゝろの又心安くするものゝ其朋友が懇意にすると云ふその人の同僚が世話に成た

課長のその親戚だとか云ふその人は近頃外國より歸朝して隨分才はトけの名を取た男だが常に朋友などを尋る時は勿論その他宴席や親睦會や舞踏會とでも云ふ時は席上の人〻の眼に附くやうに立派なる指輪を箝込んで出掛るゆゑ忽ち人〻の目に付きて

甲の客「チー君のこの指輪は失敬ながら大層見事なお品で御座り升ドレ一寸拜見

是ア中〳〵容易には得難い品彼の地で御購求めに成りましたか

紳士「ハー是ですか是アダイアモンドで先頃歐洲在留中彼の地に於て調へたもので品も正眞なもので出所も慥ゆゑにまだこの外に餘分を三ッ四ッ求め置きました

甲の客「御餘計の有る事ならば如何でせう何とも申兼ましたがその内一ッ申受けたいものです

紳士ハイ左樣サ彼の中壹箇ぐらゐは隨分お需めに應じても宜い

と忽ち壹箇緣付けたりこの時後方に扣へたる

乙の客「出來まを事なら私も壹箇願ひたい

丙の客「堂か私も一ッ

丁の客「私も堂か

と畑草三四服も喫む際に五ッ六ッのダイアモンドも博覽會の開場めきていつの間にやらどれも約定濟とは成りにけりと斯う云ふ一條さ處で是等四人の客達はこの後何處へ出るにも曩れの場所と考へる時はこの指輪を箝め込んで出掛けこの人くも矢ッ張り以前の紳士を學び其紳士より百五十圓程にて買受た品に幾割程か開きを附て賣渡しダイアモンドの持主は先きから先きへと代り行く其度毎に直段は益々高くなりたれど其頃僕は頻に外貌を粧はんと心掛る時分で有た故この話しを他より聞き込み熟〳〵思ふやう是から先き所〳〵方〳〵の紳士達に手廣く交際を爲さんとするろの時に臨み當時聞ねし某が外國より持歸りたるダイアモンドの指輪を僕が達て懇望して讓り受けたりと云ひ囃せば自ら交際の廣きを人くに示すの道具ともなる事なれば直段は少く〳〵高く有りとも買置んといろ〳〵手に手を廻しつゝ遂に之を二百五十圓に買込みたり左れど元ト〳〵猶豫ある金にて榮曜に買たるものにもあらず只外貌を粧ふ爲と一ッには交際の廣きを人に示さん爲とこの目的の外ならぬ故他の必用品に事を欠く度〳〵アー無益なものに金を出したト彼の贅澤品なる指輪なんぞに玳瑁二百五十圓の金を寐かし置事經濟上餘り得策とも覺ねず是も懷中の都合なれ

ば假令ひ一時賣却したりとて折さへあれば又手に入れる事の難たきにも有るまじ直段さへよく成らは賣却せんと思もひの外今彼處の唐物店の亭主めは無ご饂しくも只の一圓五十錢に直を附け居つたがハテ夫れに就て思もひ當つた事がある彼の亭主の口振りでは是は手前の店から差上げた品故に外ゝよりも直段を宜く買ふト云ひ居たシテ見りやア化けの皮は是にて顯はれたり今話した通り以前紳士が外國より齎したる指輪と信じたろの品は成程西洋の二字は附くに相違無きも銀座の西洋雜貨店より齎し歸た品ならん左れは彼の僞稱紳士めは賢くも己が歸朝したる機會を利用しゝ夕商法時とや考へけん大膽にも開化の熱ゑ浮かされたる人ゝの目をごまかして飛んだ僞物を賣附けたるに違ひないチエー殘念ナも時遲れ後トから欠出す野呂間の智惠は乘り送れたる滝車より詰らずアー〳〵是が若し夢か何かでこの指輪が本性物で有たならば今でも二百圓は大丈夫だらうに馬鹿〳〵しい目に逢たもんだ併し彼亭主の云ふ通りいよ〳〵銀臺へ硝子や南京玉を箝たものでは有茶ア成程壹圓五十錢は闕の山だらうハテ仕て見りやア堂しても僕の指輪はダイアモンドを臺にして旨く石をば箝たもので有たかエイ忌ま〳〵しいチエット自然込んでは見たがイヤ是もまた經驗の一ッと思ひ返して一首

安からぬダイアモンドで購ふて
箝た指輪は箝られた品

と口ずさめば下田も負けずに

お茶づけの菜にも成ぬてんぷらの
臺はぎんぬで高い指箝

第三回　飼犬脛を噛む

夫より兩人は歸宅なし又もや折もあらば散歩に同伴せん事を約したれど霖雨の爲久しく外出を妨げられ生平好みし傀報も讀み倦き滑稽洒落の貸本などにて日を暮し居りしがいつも同じ顔にて話しも面白く無ければ思ひ〳〵に座敷の隅に陣取て有りしが晝の食事も仕舞ひし揚句烟艸の火など取寄せて茶を汲みながら猿野は下田に向ひて云ふやう

猿野　凡そ世間に有觸れたる事業家の爲る處を見るに皆最初より儲るまじき組織を以てろの結果の儲からざるを憂るものゝ如く何んぞろの淺薄にして智惠の無きぞ否智惠の無きにはあらず是等の人が斯る目途も立ぬ仕事に着手するも夫には云ふ可らざる深味ありて中には起業を名とし株券を賣出し或は會員を

寡か其實無盡頼母子講の心得で一時の金策だけを主眼とするに外ならずての如き性質を帶びたる會社にして永續せぬは最初より分た事なり依て我輩は深く茲に注意し今度事業着手の場合に於ては都て人手に委ぬは勿論損益取捨等ろの宜きをよく考へ追々に盛大を謀る積りなれば最初多少の金員を要するとも無盡や頼母子の煙の如き結果を見るものとは日を同じくして語るべからずサ底で我輩年來の工風に係る今度の起業の趣意と云ふは專ら無用の物を利用するにあるので譬へて見れば或る有用物を以て他の有用物を拵へたとて素より莫大なる利を見る事は難いが無用物を有用に變ずる位凡ろ世に利益あるものは有るまゝと思ふ就ては君も知らるゝ通り都下の犬だか一體犬と云ふ動物はよく門戸を守り人に馴れ易きを以て家毎に飼はざるは無き程なれば從て市街にろの數も殖え多き中には狂犬さへ有りて小供を嚙むなどの弊害も又無きにあらず左れば犬殺しと唱へ町〻を徘徊し是等の狂犬を驅り歩行く事さへあり必用とする飼犬の外は殆ど無籍の厄介ものに過ぎず犬は都下に無用物とはなれり是等の無用物を轉ぜて利用するころ資本入らずの良法なる事をば案じ出したれ扨ろの犬の利用と云ふは外でもなく近來人力車の數非常に增加ずるにも拘はらずその營業を願出るもの日に月に殖るも皆その資本を要せぞして若干の賃錢を得るが爲なれど人智開け行く今日にして牛馬の境界に迄立入らずとても他に爲る事の無きものならんや是等の人〻に代へるに犬ころ屈竟なる獸にころあれ足下は何んと考へらるゝや我輩は既に茲に見る處ありて年來これ

に工風を凝らし遂に名案を得たれば不日手續整頓の上は府廳へ願出して實際に試る積りだ

下田　夫は妙〻近頃世間に滔〻と學理を講ずるものは隨分多きも扨實際に事を所するに臨んでは殆どその人無きが如し今云ふ君の説にして果して旨く行はれんには此上の利益はあるまじ良し〳〵奇妙〳〵シテろの犬車を挽かすると云ふは如何なる仕掛け歟豫て聞く北國にては雪の上に雪車とか唱へるものを犬に曳かすると歟是は雪の上にて滑なれば曳き易からんと思はれるが府下の如き道路には小石もあり凸凹もあり人力車夫すら曳き艱むの場所なしとせず然るに人を乘せたる車を曳き歩行くまと犬には些むづかしからん

と下田は小首を傾けて吐息をつく

猿野　ナニろこには少しも心配あるな三疋立四疋立五疋立として楫棒を並よりツーと長く拵へ是等の犬には逸々首輪を箝て括り付る時は鐵道馬車の馬の如く少しも不便を感ずる事はあるまじ

下田　成程〳〵と組んだる諸手を解放ち左れば犬の喰料とするものも馬のやうに極りもなくろの上馬程多量に喰ふ事もなければ數百の犬を飼ひ置くも左程に難きまともあるまじ我輩は犬の掛りと成りて是より數百疋の犬を驅り集めて飼ふべければ君は之に用ふる新形の車を工風して注文する事に盡力し給へ

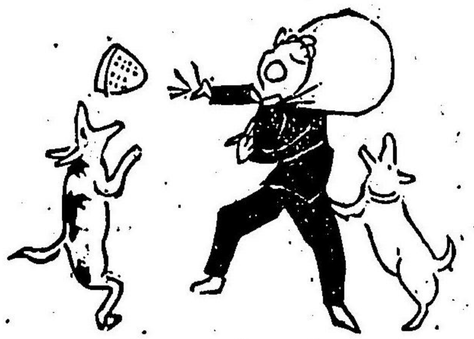
猿野　イヤ〳〵ろの車の製造法などの事は日頃工風に工風を凝らして最早不都合なる箇所も見出さざれば製圖家へ廻し置き既にろの圖も出來てあれば車の製作は銀座の秋葉に申し付けん左

うして物體木造りにしては量目も重くなれは周圍は籠細工に仕立た方が宜しからん

と評議一決して異形な車をば注文なしたり下田は犬の驅集め役を引受け朝早くより起出數多の握飯を拵へ大風呂敷に包み脊中に負ひ何れの區を問はず町々を經廻り此處彼處と犬を探り壹疋見當れば握飯を投げ與へ犬の之を喰ふ内に首輪を箝め繩を附け又壹疋の犬を見當れば握飯を與へては同樣の手續きを爲し終日掛りて白犬黑犬斑犬赤犬等取交せて十三四疋の犬をば曳て歸りけり

此時猿野は首を延し車の出來る今や遲しと待搆へたる折しも漸々注文の車出來上りたりとの報知を得たれば是等の車に府廳の檢印を受

けなどし日を撰みて實驗せばやと日ごろの用意に忙しかりしが漸く支度も調ひたれば場所はまづ外神田秋葉の原にて試むべきと或る朝早く兩人は殘りなく諸具を纏めて宅をば出けり



此時秋葉の原にては今に如何なる事の始るやらと往來の人も足を留め不審に思ふも尤なり

頃て午前十時近くにもや徐〳〵往き來の人も繁くなる頃向ふの方より數十疋の大犬を珠數繋ぎにして曳き來たり後トよりは車臺に載せる大きな笊樣のものを挽き來るにぞ只さへ物見高き都下の人々なれば種々樣々なる說を爲し彼の笊を載せたる車は何んでも輜重隊が兵糧でも積む歟又は生きたる豕でも運ぶものならんと云ひイヤ〳〵何處かの紙屑屋の親分にても引

越すならんと甲論ずれば乙駁し取り〳〵の噂するろの人中をハイ御免〳〵と押分け〳〵出で來る下田は曳き來たりたる件の犬をまづ三疋ほど繰り出し首輪を箝めて夫〳〵車の楫棒に括り附けなどして凡て御者の立廻りを爲したり。

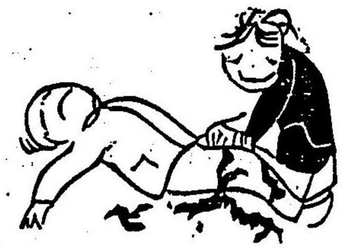
猿野は鼻高〳〵と革提に鞭を持添へて今日の日頃工風を凝らしたる犬車の効用を衆人に示して喝采を得んものと靜〳〵と車の許に寄り付み彼れ是と指圖なしつゝ手綱手に取り笠の中にの座を占めたり。

頓て支度も調ひてソレ宜しと云ふ聲諸共に鞭を揚げシッシ〳〵の聲止み間なく追ひ立てるにの犬は益〳〵氣を苛ち前に車を曳くどころか狂ひ廻りて逃げんとするを逃しはせじと立塞り鞭振り揚げて打据へれば犬はキャン〳〵泣叫び伏すもあれば轉ぶもありこの騒ぎに下田は犬に脛を噛まれ。ア痛たゝゝゝ。ア痛たゝゝと片足揚げれば又片足に噛付かれ矢庭に堂と倒れる途たん笠の中でも猿野は氣を揉み鞭もて犬を制さんと。ッゝ立ち上りて足踏み延ばすこの却合に車の中心傾きしか車は臺ごと覆へりたり左なきだに笠の目の粗きが爲中に置

きたる革提の口金明いたるまゝに動揺せし
ゆゑ路そがら銀貨と錢とを取交せて爪の底
より蒔き散らしたるを今更悔いても詮方な
みだ尻の埃を拂ひつゝ

猿野ヤア〳〵下田堂した〳〵何處を嚙ま
れたエー大變〳〵コレこの血汐はマー堂だ
お汝足を喰切られて仕舞やア仕ねへか氣を
慥かに〳〵

とこの騒ぎを見て居た小學生徒の酬した赤インキを猿野は血しほと思ひ違へ下田の投出しをる足に怖〳〵取據りて見て居る樣を傍目に見れは隨分可笑くもありし下田は猿野の言葉を聞が否や疵は左程にあらざるも



血汐と云はれたる言葉に氣を奪れ俄に虫程の息遣ひとなり

下田ヤヨ猿野君〳〵疾く名醫を招き來れこの容體ではこの世で君に頼むこともモー是切りに成うも知れん死んでの後の香奠は斷りにするからろの代りとして我輩息のある内に骨を惜まず奔走して給はれ時間が移りては迚も叶はん早く仕て呉れぬト死んだら屹度化けで出るぞゝ云ふ傍に揉合ふ群衆の人〴〵はドッと笑ひ

見物人アレ間抜け男よ頓痴奇よ今この騒ぎを見物して居た小學生徒が込合ふ人に足を踏まれ取落したる赤インキを血しほと見たかエー箆棒〳〵

と囃しながら散り〳〵に立去る後トに殘りし怪我人は是等の人々の言葉を聞付けて内〻ポット息を吐きまづ宜かったり嬉しやと足の疵

所を撿め見れば成程血しほと見しは赤インキに相違なく股衣は羅紗にて地も厚きゆゑ噛んだる犬の齒も貫らねば二人は是にて安堵なし

「イヤア飛んだ怪我をしたト思たがマッ〳〵塲所が秋葉の原だけに無難に濟んで目出度かつた

下田ナニ馬鹿を云て呉れまい犬に噛まれても秋葉様の御利益で輕く濟だも古めかしいやア

猿野「イヤサ御利益でもねへが塲所が秋葉の原だからソットかんだに違へねへワッハ、、、、、

仕損じたわが身を犬と人や見ん　千枝

尻尾を卷いと這ふ〳〵の體こゝ迄は智恵も廻はらで犬車　失策

脛を噛まれて臍を噛むとは

第四回　出火の報再び燃立

秋葉の原にて猿野下田の兩人が行ひたる犬車の試驗も案外の結果を見たる猿野は失望の體にて有りしが平生の氣質とてなか〳〵是等の失敗に懲りて思ひ止る景色も見ねど熟〳〵人間の活路の難き事を悟り是も又よき經驗の一ッにやあらんと思ひ返へし

猿野「アー我ながら誤りし今まで爲せし如き淺墓なる事柄にては迚も〳〵今の世の中に飯を喰て通ることは思ひも寄らぬ哀し〳〵今度は列に方向を變へて又一ト奔走せずばなるまい

と今後爲すべき事業の順序をあれやこれやと考へる折しも下宿の外面騒がしく格子戸ガラリと明く間もあらせず息勢切て跳び込むもの

あり誰ぞト見れは先刻近所の温泉へとて出行きたる下田なれば猿野は膽を潰し

猿野ヤア下田堂した〳〵又秋葉の原の二の舞ひを演ずる氣で狂犬にでも追駈けられたか素的に泡を喰ひ込んだノ是サ〳〵洋靴の上へ土足丈けは願ひ下げに仕たいもんだ

下田エー仕舞た謝罪〳〵しやざいの壺燒きろんなに角を出さずとよい哩この履物を脱ぎさへすりやア足は奇麗だ時に猿野君この大風に出火があるが知て居るか僕は是から直

ぐ友人の方へ見舞ひに出掛る積りだが火事の節にハ洋服に限るから君の服を貸し給へ

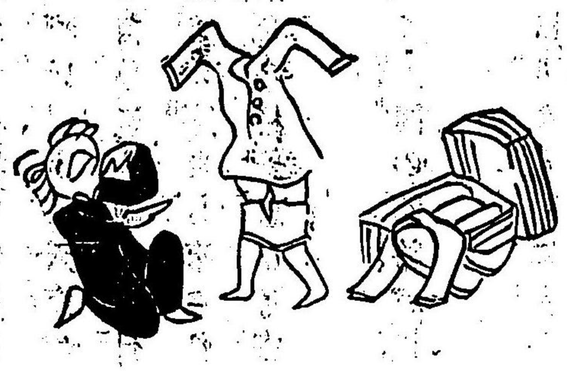
と有り合ふ行李の蓋を明け行李の上ワ側に貼せたる紙に包みし編み物を取出し

下田ヤア是ア何んだ妙なもんだナ猿野君

猿野そりやア舶來の猿鼻褌よ

下田左うかよし〳〵

と云ひながら逆さに手に取り猿鼻褌の下の方の穴より先きに足を突込みたる故旨くは穿けざるも編ものなれば無理無たいに足の附根まで穿き込み夫より襯衣を着んとて天窓より冠りしは宜けれと湯上りにて濡れたる天窓に冠りし事ゆゑ急には着ら



れず筒袖に半ば通せし手を揚けて右に振り左に動かす有様は宛然首の無い幽霊かと思はれ漸う〳〵にして襯衣の上の裂け目より天窓が出顯したる故茲に始て襯衣の紐扣子を掛けたれど何分にも納りの付かぬのは腰から下にて素より西洋形の犢鼻褌を逆さに穿きし事なれば股の工合甚宜しからず是にては迚も火事場の働きなどは思ひも寄らずト

下田　猿野君堂も舶來の犢鼻褌も宜いが國に依りて人間の體格が違ふ所爲か日本人にやア堂も旨く適はねへ子

猿野　ナニうんな事アねへ編物だから大概な人には可なり間に合ふ筈假令ひ少〳〵適はぬトした處が隱し所と云ふ位の事だから人に見せる譯でなし夫で宜と云ふものだ

下田　イヤ行けねへ〳〵是ぢやアサッパり隱れねへから隱し所とは

些も云へねへ是が本統ゴ隱れたるより顯れるは無しと云のだ

ら

と云へば猿野は來て見て吹出し

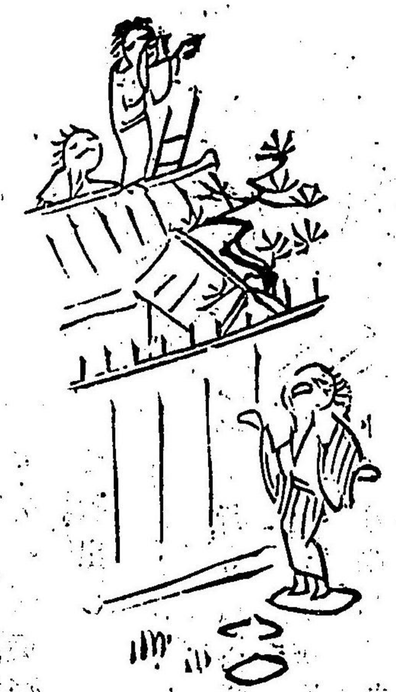
猿野　アハ、、、君是ア逆さに穿いたナ是ぢやア行けねへ筈だ

下田　ウン是ぢやア逆さで有たか

ト云ななから折角穿いたる犢鼻褌を又も脱いで穿き直さんとする折柄もフト窓より隣家の物干を見遣るト此時物干より一人りの女が今洗て絞りたるばかりと見ねし濡れ浴衣を四五枚彼地此

地に廣げて居たを見認め

下田「ヤア此烈風ぢやア堪らねへ遠い火事と見る内ゴモー其處らまで燒けて來たかアレ〳〵濡れた着物で火の子を防ぐ樣に成た



ト見へる是ぢやア慌り出られねへ」と獨言に云ふを聞附け猿野は周章て突然庭へ跳び出し西を見東を眺るも一向に見ゑず近傍の樣子もヒッソリとして居るゴ下田が餘り騷ぐ故猿野も氣を揉み出し遂に二人りして騷立るゆゑ隣家のものも心附きしか

隣人「モシ〳〵何處かに火事でも御座り升か何方の方に見ゑ升か

猿野「ハイ何んだか火事が有るやうでもあるし無いやうでもあり何

處だかまだ在籍の處が判然いたしませんが噂さには神田鍛冶町の八百番地の湯屋だとか申す事でそ

隣人「ハヽア夫ぢやア其處は昨日も燒けた處ですよ

猿野「オヤろんなに一ッ家が幾度も燒けは仕ます

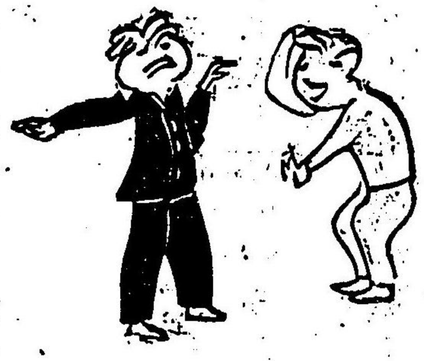
まい夫ぢやア何かの間違ひか知らん

と云捨て是はと點頭く樣子にて徐〳〵と庭より内へ這入りながら火事は些も見ゑねへ筈だト笑ひながら下田に云へば

下田「猿野君何處を君見て來たのだ火事ア神田で

と云ふのに方角違ひを眺めて居ては合せ鏡でも仕無くちアや見ゑる筈はねへ

猿野「ナニ己ア君に摘まれたヨ



下田ナセ〳〵

猿野夫でも君ア屹度交番所に只今出火と書出して有たのを見て來たのだらう

下田アー左うとも〳〵

猿野夫ア君昨日有た火事の報知が其まゝ張て有るので彼なら已ら も昨日から知て居たア夫を今始て讀んで來て人を騷がせると は隨分嚴い話しだ

下田何んだ彼ア昨日の火事の報知だと夫ぢやア大きに見當が違た

此時下田は猿野に云譯の心で一首

魂も空に飛び火と立さはぐ
火事の話しは取消し〳〵

猿野も續て

火事〳〵と騷がせ君は火元にて
わが身もとんだ類燒をする

第五回　機闘の發動

是にて火事の話しは全く消し鎮りての騒ぎに取散ちしたる座敷の衣類など元の如くに片付けて漸く兩人は座に着きたり

猿野　時に下田君僕は近頃又一ッの器械を發明してまだ人にも極々秘して居る事だが遠からずこの器械の製造方にも着手する積りだが夫に附ちやア又いろ〳〵君に奔走を賴まにやならぬが……

下田　當時新發明〳〵と名乘て彼地此地でいろ〳〵な物品を賣出すものがあるが多くは從前の品物が一寸嘘をしたか欠ぶをした位な事に止り少しばかり顏の形が飯櫃になるか三角に成た丈けにて全く土臺性質から變て產れ出した新規新發明の品物とては鉦太鼓で尋ねても見當らぬやうだが君の發明品と云ふの

は餘ッ程風の變た品物歟但しは矢張り前に云ふた嘘か欠びの品物ぢやアねへか

狼野　夫ア君の今云ふ通り實に當今發明〳〵と鳴り立る品物は夥多しくある事は有ても皆玩弄物に均しくて必用とすべき品物は無いと云ふても宜い位なことだ併し拙のはろんな物ぢやアねへ成程中以下の智恵を以て考へたら知らぬが是でも御膳上等精煉飛切たる智恵を絞りろの上夙夜寐ねずと來て考へ遂げたものの丈け有てその工風も恐らく衆人の意表に出たる新案の器械的サ

下田　ハーテ夫は妙〳〵どんな器械だか

狼野　左ればろの器械の便利を擧れば只壹箇の品にて數品の用を兼るものにて始は尋常の椅子として用ひ然して之に仕掛けたる一ッの發條を押す時は瞬間時にして今迄の椅子は變じて卓子と成り又再び發條を押す時は忽ちにして三間梯子となりろの他變化極りなく殆ど望みに應じたる物品に變化すると云ふても過言にはあらざる程なる古今未曾有の要器にしてろの名を發條梯子と名附けて實地實用を專一となしたるものなればよもや君にも尋常一般の發明品と同區中に陳列して品評は下だすまいと思ふ處だ

下田　成程旨く考へたもんだ夫ア君早速專賣免許を願ふべき品物だが一體全體堂云ふ目的からこんな奇體列な器械を考へたもんだらう

狼野　うてだて底がソレ我輩所有の智恵襄にたッぷり直打のある處で凡そ世界に器械と唱へるろの物は只一方專用とする使ひ道

の外には少しも他の用便になる事なく譬へば火箸と云へば食用の箸には成らず帽子は天窓に冠るの外釜の代用をなさず長靴は革財布にも用ひ難く洋杖はしんばり棒に丈が足らず組は鼻緒をそげても下駄には用ひられず釘抜で鼻毛は抜かれず裁縫師の火熨は左官屋の鏝にならずまだ〳〵ろの他を擧ぐれは經濟學を鼻にブラ提げて實地の經濟ゑ迂きもあり政治學を修めながら政治の大體にポンヤリ乎としたる如きも分業を主張する學者の見識に依るものかは知らざれど何んと是もまた不自由なる次第ならずや君よく考へて見られよ造物主が人の爲に製造して授けられたる二本のでの手は無慮百般の用便を足すのみならず

幾ら之を用るも摩れ損ずるの憂ひなく是程重寶なるものは有るまじ只一本の手と雖も手枕として枕にも使ひ爪印を捺す時は實印の身代りをも爲し娼妓は肱鐵砲として敵を防ぐの武器にも使ひ拳骨と唱へて才槌にも代用し疊に水を飜した時は雑巾ともなり笛にも成りて呼子の音を發ち人を呼ふ時に掌を打てば鈴の代りを爲し雨戸の倒れんとする時は突かい棒となり挺とも成りて其重寶便利なる事枚擧るゑ暇あらず然るに今この世界にては歐羅巴と云ひ亞米加利と云ひ種〻の要器を製ち出すことは人〻のよく知る處なれど彼の高大無邊なるゴットの眼より之を見る時は定めてろの細工の不器用なる抱腹に堪へざるべく夫故に歐羅巴の發明亞米加利の新發明ろの驚くも感ずるも只この凡俗世界凡人の上にあるのみにて何んぞ奇と

する處ならん如何となれは僅の一物專用の器械のみを製する
に過ぎざればなりてこの通り一方專用の品のみ多く造り出して
後世益々止む時なくんば世界の器械の物置小屋となり地球上
の積面を幾分か狹くするに相違なく遂には身を容るゝの寸隙
をも見出ぬほどに充滿すべし底で僕は從來茲に感を起し迚も
ゴッドの製作に成りたる品物には及ばずとも責めては壹ト品
にして十五種或は二十種の用便を兼る樣器械の改良を謀るな
らは大にしては世界の面積を廣めべく小にしては九尺二間の
裏店も疊の數を增したるに同じからんコレ我輩の當初ての新
器械を造り出せし大趣意よて有りし併しての便利なる新器械
あるも知る人無ければ重寶にも成らず世人に廣く知せるの一
法は諸新聞紙に廣告するに勝れるはなし何んと下田君左うで

はないか
と是より猿野は机に倚りてサラ〳〵と書き下す其廣告の艸稿を見れ
ば

○便利新發明發條梯子の廣告

夫れ梯子の用たるドン尻の低きよりテッペンの高きに昇る
要具にして貴顯紳士より降て素官貧の書生に至るまでも是
無ければ五層樓の上に愉快を買ふ事叶はぞ屋根の棟に這廻
りて雨漏りを防く事も出來ず高位よ攀ぢ昇り高官に這上る
も皆梯子の段階を踏まざる可らず假令ひ外に踏臺脚立の類
有りとするも踏臺脚立は形小にしてろの用も又狹く僅に棚
の上の牡丹餅を摘んで小十半の咽を潤し又夜具棚の枕を卸

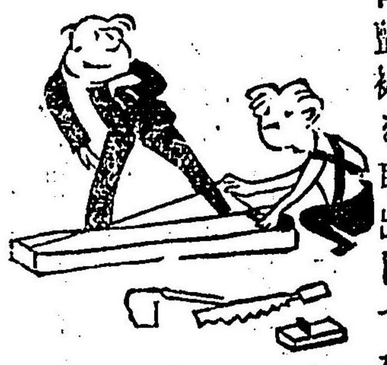
して晝寐に昨夜氣を補ふ位な事に過ぎず左れは踏臺脚立何んぞ梯子とろの便利を競爭するものならん哉大津繪の福錄壽は梯子を利用して逸早くも開化の散髮となり粂野仙人は梯子を利用そる事を知らずして遂に雲の上より墮落(免官とは違ふ)して腰の骨をブン拔きしにあらず哉斯る出來合有觸れたる安價梯子と雖も之を用るの利と用ひざるの不利とは雲泥月鼈青表紙と團珍ほどの懸隔あり今我新製に係る此發條梯子の儀は是等尋常の梯子と異り始は椅子として使用し又踏臺にも代用すべく然して一の發條を押す時は卽座に卓子と形を變ド又寐臺とも爲すべく再び外の發條を押す時は忽ちにして三間梯子と變じて親分の近火にも魁けを爲して土藏の窓の戸前を塗るの急用を助ける等奇體奇體烈古今未曾有の梯子なれば用てその効用をお試あれと世間家持の諸君に御披露申そ

猿野 何んとこの廣告を諸新聞紙に掲げたなら夫れ〳〵目新しき梯子なる故買人の多きは必定なりその時こそ我發明品も世に出でゝ始て人に重寶せられ職工の製造方や賣捌きの手續きなども間に合ひ兼る位ならん左ればこそ今より余程豫備をば充分爲し置かずば種くの不都合を見出すならん夫に就ても今手始に五六挺の梯子を製造なし試に之を賣て見るも景氣を窺ふの一策ならん

と猿野はこの作事を大工に云付け此所の發條は斯う〳〵爲し此所は箇樣に造るべしと居ながらに指圖おし程なく異形な梯子が出來上りたる此折柄旅宿の下婢が來客ありと告げ來たるにぞろの名を問へば

過日來この發明の梯子の話しを爲し置きたる或る私立學校の校長なる朝根十次と云ふものにてこの人は同縣の人でもあり豫て樣子も知り居れど一体物好きなる性質なれば猿野の發明をば深く感歎なし居しが最早ろの品の出來上りしや否やを尋ねながら態〳〵この家に來たりたるなれば猿野の歡び一ト方ならぞ洋氈褥を取出してまづ上座にぞ請待なしたり

校長　今日出たは外でも有りませんが過日來一寸れ話しの御座た發條梯子とやらを其後もいろ〳〵勘考為て見ましたが至極面白い御工風にて第一壹箇の梯子にて數箇の



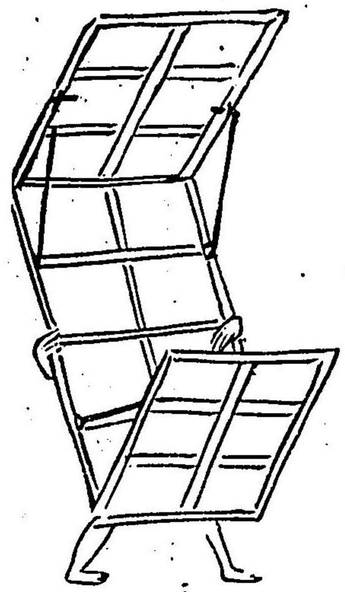
器物の用を足す事第二には數品の用を兼るにも拘はらずろの代價の安直なる事第三には堅牢にして永久修覆の手數を要せざる事等の三ッの便益あれば世上の人は掇置て差詰め我等住所の如き空地少き場所柄にては建家も從て手狹なるゆゑ日用の器具に至るまでも要用品の外は成るべく省く位にせねば場所を塞るの不都合あり茲に至り君の製造品の如きは最便利を極るものなれば堂かろの器械を拜見いたし度わざ〳〵今日お尋ね申しました

猿野　イヨー夫は〳〵能うてろ御來臨併し是れ迄御足勞は掛けませずとも實はナ器械出來次第是非御一覽に入るつもりの處何分にも職工の方が手廻り兼只今漸々出來上り

ました處是よりは最早少〻く裝飾を加るばかり尤裝飾は無くとも大體の處は御覽あるも仔細御座らぬ

と猿野は庭の方へ出行きしと思ふ間も無く壹挺の發條梯子を抱へ來たり恭しく椽頰に据へ附け

猿野　此處の發條が斯う成ると是が斯う成り是が倒るゝと是が跳ね上る



と一伍一什を說き明かせば

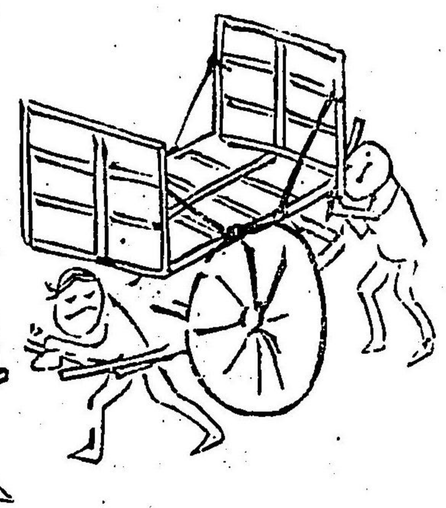
校長　ヘヽー成程、フヽン成程、デゲスカ、如何さま、ヘヽー、ホヽー

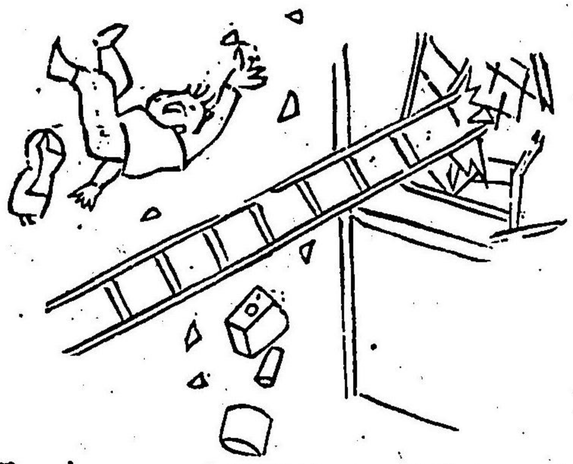
と感服の體で有りしが頻りにこの器械を懇望し代價は何程で運賃は幾らと尋ぬれば猿野は得たり賢しと此機を外す

猿野　實は仕事を急ぎし上に事慣れぬ注文もの故種〻の手違ひ等もありて職工の手間ばかりも見込よりは餘程多分に掛りましたし併しその代りには木材鉄具の代價などは算用いたさず只手間代丈けをお拂ひあれば夫にて宜しく尤向後出來の分からは價もズット減却致す積りなれば御懇意の御方〻は申すに及ばず用ひて便利の品柄なれば何分所〻へ御吹聽を願ひまを

と聞くより校長は直段に貪け引けの談じも出來ぞ少〻高價とは思ひながらも代價をば拂込み早速品をお遣し下されたしと賴み置きて歸りける

跡より猿野は車を雇ひ來たりて梯子の荷造りを爲し自身宰領して校長の許へ持込みしに住居手狹なればとて假りに臺所へ据へ置く事とし校長方にては取敢へず卓子となし使はんものと晝はいろ〳〵の皿器物などを載せ置き食事の支度はこの上にて爲し夜は小使の寐臺に用ひ四五日間試みしに至極便利にて評判宜かりしに或夜例の通り小使がての寐臺に昇りて眠りに就かんとせし折りに如何なる乘機にて有りしか思はず發條に障りしものにや寐臺は突然持前の秘術を顯はし三間梯子と變化したれば何かは以て堪るべき今まで上に伏し居たりし小使どのは遠く天井の方に跳ね上られ去





らぬだに四邊り手狹き臺所なるに横一文字に三間梯子と成りたる事なれば梯子の突ッ先は小窓を突拔き跳上げられたる小使はステン堂と板の間へ落ち來たるての地響きに家内一同目を覺まし是は必定彼の大坂公判中の黨類でもての近傍に隱れ居り誤てダイナマイトでも發せしならんと人々臺所に集り來たりよく〳〵見れば斯は如何にダイナマイトでも何んでもなく此頃買入れたる彼の寐臺の機關が發動して俄然三間梯子と形を變じたるにて狹き臺所なるがゆゑろの働きを充分にする事の出來ざりけん窓の戸障子を突き拔きて横筋違ひに張り伸びたる樣は家の内に兩國橋を造り出せし

に異らぎ夫はまづ瓦しとして見た處が只困たるは怪我人にて寐臺に有りたる小使はこの器械の發動のため投げ揚げられしものにや有りけん板の間に倒れしまゝ聲さへ聞かねば定めて要所にても打ちしならんソレ水よソレ藥寶丹は無い歟精錆水は夫りや入らぬと騒ぎ立種々に介抱する内漸々くの事にて小使は息を吹返へし稍人心も附きたる樣子是にて一同も安心なしたり扨もての夜を明る遲しと待構へたる校長は翌日早く猿野の下宿の戸を叩き遽しく面會の義を申入れ

ゝば猿野は驚き走り出何事にやと問はんと仕たれど近所を憚り其處は端近なれば扨て己れの居間にぞ通したり

校長イヤ早速ながらお話し申すが君の製作に係る彼發條梯子は便利どころでは無く寧ロ危險とも謂ツべき品物で實はナ昨夜例の通り寐臺として使用中俄に機關が運動を始めイヤハヤ飛んだ怪俄人を拵へ今病院にて治療中ではあるが一ツ間違へば一命にも懸るならんがろの危險なる僕の爲には爆裂彈も同じ事斯る危き器械をば世間に廣く賣弘めるなどゝは思ひも寄らず僕の考へに。あれは

手丈夫なる鐵柵でも拵へてろの内に置く事にでもせざれば多くの人を傷めるの恐れあらんなぅ〳〵日用品などくして備へべきものにあらぞ兎ユ角僕の買入れし彼の品丈けは至急引取て貰ひたし然らざれは今にも再度彼の器械が發動したらんには夫こそ勇々しき大事件を引起さん片時も早く引取られよと急き立られ天窓をかくとも知らぬ猿野は兎斯うの返辭も胸に閊へ碁石程なる二ッの眼を只白黑と瞼くばかり折角首尾よく壹挺の梯子を賣附けたりとの歡びは忽ち變ドて憂ひと化ける是も器械の發動に因る歟と青くなり又赤くなり顏色宛然カラクン鳥の如く頓て額の汗を拭き〳〵左れば即刻御供仕らんと校長の後トに附き行き臺所に張り廣りたる長梯子を取片附け元トの姿のテーブルに疊みながら口に任せて云譯を並べ立其上思ふやうこの買主が外の人なら格別從前よ

りの知己でもあり同縣人にて門閥家と來て居るゆゑこの後とても評判を失ふては爲にならず所謂る名譽が大切なりと流石要點に心は附きしも疲弊極まる身上にて痛し痒しの板挾みに爪を剝ぐ程の思ひにて甕中より怪俄人の療治代として金三圓を取出し熨斗の代りに血の涙を添へて差出し條理よくこの場を引取りて猿野は宿所へ戻り來たり待構へたる下田に向ひ始終の話しを仕て聞かせ

猿野「アー是もまたよい經驗の一ッで有たア

と云へば下田は堪り兼て笑出し

下田「イヤ〳〵一ッどころか失敗の第三番目だア

此時猿野はエー忌ま〳〵しいと咳きながら取敢へず

賣り附けし發條梯子の三げんも
打てかはつて飛んだ一けん
是を聞きて下田も後れず
賣たとて虻蜂取らぬ商法に
ひら蜘となり詫をするとは

第六回　礦石の發見

丹誠を籠めて造りし器械も今は鴉のはしごと食ひ違ひ四ッ谷赤坂虎の門千里を走る失敗の噂は四邊近所に囂しきも素より熱心なる猿野の事ゆゑ些も人には頓着せず又もや後ト釜の工風をなせしが今迄種々の工事に暇を費し待ぬ月日の經ち易くていつしか花の春も過き行き入梅の雲さへ晴れる時節に晴ぬは壹人り猿野の心又も身の上に降て湧たる損耗にふさぎの虫や赤蛙獺の虫まで手傳ふて些細の事にも憤悶たくなり斯くては旨き考へも出ず日頃爲したる無駄骨折りを慰る場所さへなく別莊とか妾宅とか云ひたい處もまづ是等は當時夢にても見ると極めて安河原の湯治にても出掛けたなら寧そ氣が變て宜い考へが出やうも知れずと思ひ付たるものにや有りけん猿野は下田に向ひて

猿野ナント君滅法暑い時候に成て來たが幸ひ本年は虎的の進撃にも出逢はずろの上鐵道も出來まして國府津までは格別時間も費さず行かれるから箱根の温泉にても行て見やうぢやないのとの發言に下田は素より動議もなく卽座に評議一決したれば一應ろの事を宿主に斷ゲ革提の支度や手荷物の用意等は都て下田に依賴したり是より兩人は不日出立の見込みにて今まで爲したる駄目仕事の跡片付けに奔走したる二三日過ぎて稍用向も粗方濟みたれば下田に大きな革提を持たせ同行二人連れ立ちて新橋さしてず發足なしたり

下田は以前出京せし時は滊船にて來たる事なれば滊車に乘るは今日始てなるゆゑ物珍しさに勇み立ち發車の時間を今や遲しと待構へしが頓てガラン〳〵の鈴と均しくピーゴロ〳〵と停車場を立離れ右や左りと目を配り居ながら咏める風景は東京名所の走馬燈に異ならぞその時猿野は右の方に指さして下田に向ひ

猿野「ノー君彼の向ふの森の中に塔の見えるがあれが增上寺だせ

と云へば下田は滊車に乘込む時餘りの混雜に氣を擊たれしか猿野の話しもボンヤリ聞込み凡そ五六秒時も間の抜けた時ぶん

下田「ナニ〳〵增上寺だ何れが〳〵ホヽー彼の海岸に見へるのが增上寺か彼れなら少しばかり森は見へるが塔の事は扨置き只の

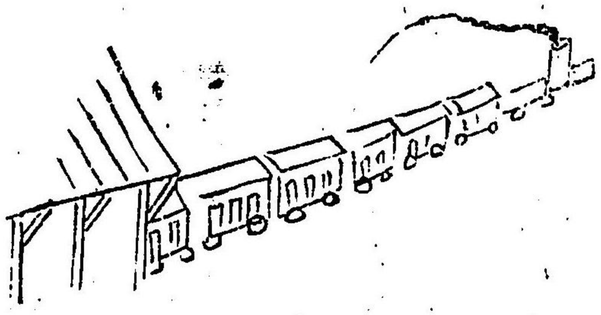
一ッも見へやア仕ねへ

猿野「イヤ今れ汝の見て居るのは彼ア泉岳寺だわ
増上寺はモー遠ッに行き越して仕舞たア早
く見れば宜いのに

下田「フー左うか彼が名高い泉岳寺で有たか夫ぢ
やア例の義士の墓のある寺だ子成程嘘でも
あるめへ本堂らしいが屋根は隨分大きく見
へる子

猿野「ナニ彼の大きな屋根の見へるのア彼ア川崎
の大師さまだ泉岳寺はお汝のグッ〳〵して
居る内遙か右の方にモー隱れて仕舞たワ

下田「エー左うか箆棒に世話しねへ話しだ己が見やうと思て居るそ



の内に最ういつの間にか後のお代りが目の前に遣て來て居ら
ア何んの事はねへ頭部六が西洋料理に出喰はせたやうなもん

だ

と、大笑ひをなしたりての時下田は漸く心
が落付きし樣子にて何やら默て考へ居り
しが四邊見廻しフト首を揚げ目の玉を光
らせ

下田「イヤ仕舞ふた大變〳〵猿野君〳〵

猿野「何んだ堂した出し抜けに膽を潰さ
せるぜ又例の膝ッ子僧へ吸殼でも落した譯か

下田「イヤ〳〵夫なら隨分我慢もするが左うぢやアねへモット大變
な事件。命から第二番目我々二人が動産とも不動産とも頼み切

たる彼の大きな革函を私や停車場へ置て來た

猿野「エヽヽヽナニ。置て來たト其奴ア飛んだ事を仕て呉れた彼が無くちやア夜も日も明けねへ

下田「是ア困たナ〳〵彼の中にやア僕が豫約で買た英和辭書と夫アいゝが名染のウーメンの寫眞壹枚彼を無くした

は何より悲い彼奴の心情を知らなければ格別あれ程に迄僕に熱心なる事を思へば僕にてろ直打が有るなれ他人に用の無い品物若し破られたらば一大事是や此儘に捨ては置けぬ堂か此處から取りに行きたいもんだ

猿野「ナニ宜いサ次第に寄たら電報を掛けるト仕やうヨ

下田「イヤ〳〵自身に行て抱へて來ないぢやア堂も心もと無いと語るを聞きて一室の人々は各顔を見合せてクツ〳〵と笑ひ出す猿野は滊車に乘込む前持越したる革函の餘り大きくて目方も重ければ手荷物にも出來ぬ故荷物掛りに托したるを知らぬ下田は置き忘れたりと泡を喰ふを心の内に可笑しく思へど眞面目に云ふも興がなく聞ゆれば下田の言葉を受け續ぎて

猿野「チーサ彼の革函の中にやア私の名染みの寫眞も入れて置たナニ君ろんなに心配するにやア及ばねへ今に國府津の停車場へ着たら寫眞の別嬪は皆な受出して見せやう夫にやア私が魔法を使ひ紛失したる革函はろの儘こゝに取出し御らんに入れまースと出して見せるからろの時足下は豆太鼓でも叩く役になるが宜いサハヽヽヽ

下田夫ちやア彼の革函は君が堂かして置て呉れたかそんなら構ふ事アねへ

ト立てたる腰をムッ〳〵と落付けて腋の下の冷汗を拭きろちこちする内早や瀛車は國府津の停車場に到着し革函も難なく受取りて夫より馬車に乘替へ湯本なる福住に至り茲に兩人は一ト間を借り受け足を延して休息なしたり同じ旅宿の中此處の室彼處の室と窺ひ見るに時節柄とて明たる間もなく入込む多くの客の中には洒落風流に凝るもあり伎藝に富めるものは今日は尺八翌日は圍碁と日陰の移るも打忘れたる樣は眞に人間のパラダイスとも見へたるが此方の座敷は寂莫り閑質に取

られた猿野と下田身に覺へたる遊藝もなく折り〳〵聲聞掛合ひ欠びに永き一ト日を持て餘まし何か趣向は有るまいかト遊戯に慣れざる二人の評議も不粋と云はゞ云ふに任す猿野の心に閑暇なきを汲取るものゝ眼に見れば却て殊勝にぞ見へたりけり

斯くて一日と過ぎ二日と經るまゝに名染の人〻も近所に出來て互ひに問ひもし問はれもしつ談話に浮かれて暮す日もあり又は運動と唱へて谷を渉り山を攀ぢ少しく土地案内を知りし頃は此處の湯場も面白くなしとだん〳〵七湯を巡り〳〵て遂に蘆の湯まで昇り來たりしが暫くこゝに逗留なし又も例の如く日々近傍の山々を巡り之を

以て無上の樂みとは爲したりしが元來徒然に日を送るをば好まぬ性質の猿野なれは山中にても常に土人に出逢ふ事あれば地名を尋ね地形を問ひ或は野生の草花を見れば摘み來りて細に吟味し聞得たる事あれば手簿に書留めなどして何事を論せずよく綿密に記臆に備へたり或日の事なるが猿野は下田を伴ひて姥子より二タ岡に達する途中見上るばかりの木立の蔭を此處彼地と經巡りながら

猿野「アー今日はいつもと違て二人連だから話しも出來て愉快〳〵。

と云ひながら詩を吟じ唱歌を誦ひ時として獨演說などを始るも木魂の外に聞は樹の根に腰を休め慷慨激烈なる

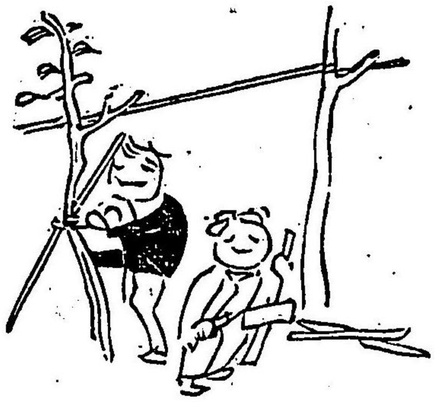
くものの無きは又山中の逸興とも見へたり斯く各自隨意を極めて行く途々も平常物數奇なる二人りの事故人の通ふべき小徑には出ずして却て態々嶮しき岩石などに攀ぢ昇り山又山を越へ行く折りしもフト見る岩の突出たる邊りに白茅の生ひ繁りたる大きな洞穴を見出したり猿野は彳みて暫く之を見て有りしが頓て下田に向ひ

猿野「是なん察するにいつの世にか人ありしの山中に金坑あるを知りて早くも此處に來たりて掘試みたるものにや有りけんハテ濟らぬ奴もあれば有るもの

ゞ併し斯う中途にして事業を廢めた處を見れゞ這奴も矢ッ張
失敗だんべェ
と覺へある身には感じも早く物識り顔にゞ解出せば下田は聞て半ば
信じ
下田成程左う云ふ事の無しとも云ひ難し損益償はずして一旦採掘
を中止した礦山とても持主代り人代りて却て以前に立越へた
る採礦の額を出し巨萬の富みを爲したるものあるはうの例無
きにしもあらず其上礦物の學進み採掘の器械備はる今日なれ
ば一旦廢したる礦山なれば迚志あるものは等閑に見做すべか
らずだなんと物は試しと云ふが這入て此洞の中を一見仕やう
ぢやないか
と云へば猿野は素より望む處なればこの言葉に益勇み立有合ふ樹の

枝折り來りて艸を打き蔓を斷ち路無き處に路を開き先きに立ちてゞ
進みけるが洞は左程に深くもあらず
七八間も進みたる頃最早入るべき道
も見へず左れゞこそ其昔餘程掘り試
みたるものならんが年經るまゝに斯
く埋ゝたるに相違なし夫にしても逐
に志を達せざりしものと見へたり洞
の彼地此地採掘の痕を吟味するも金
銀とも有りさうにも覺へゞ併して
の洞穴こそ兩人が廣大なる目的を達
せんとする事業の第一着慾の大山に入るトンネルの最初の入口とは
成りにけり

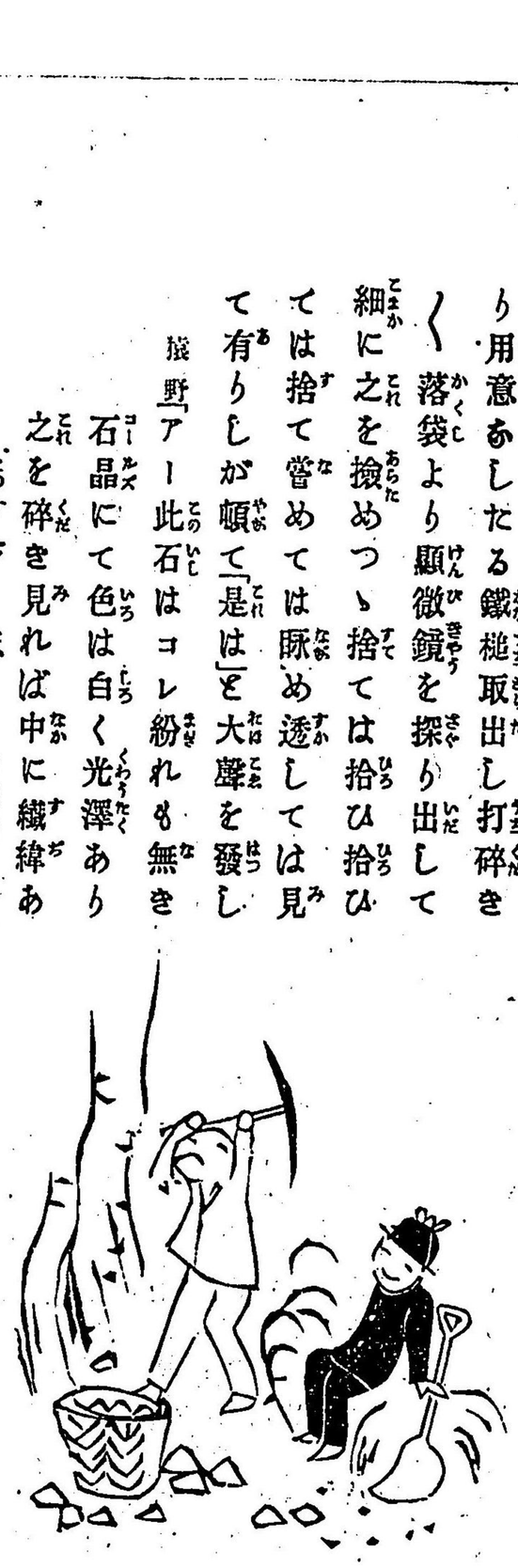
是より猿野下田の兩人は旅宿に歸り暫く評議に時日を移せしが兩人の話は都て割符を合せたる如く礦物掘取りの手段少しも齟齬をる處無ければ互ひに心を勵ま、せつゝ爲せし用意も粗調ひ役に當りし助鄕人足の如く日々握り飯を腰に括り附けいろ〳〵なる道具を擔ひて山中を徘徊なせしが遂に彼の發見したる洞の邊りに平坦なる場所を見出し此處ぞ屈竟なる位置なりとて神代の昔に造りしかども覺しき粗末無造作なる小屋をこしらへ茲を本陣と定め自ら坑夫ともなり持主ともなり兩人の苦役は云ふばかりも無かりしがいよ〳〵着手の場合と成りし曉には迚も僅なる人手を以て屆くべき事にあらねば近傍の村人にもその由を告げ後には多くの人々を雇ひ入れて現在の



洞口より掘り始め遂に數百尺の深きに達したれば此邊ぞ銀塊もやあらんと覺しき處に空氣拔きの穴など穿ちて身體の保護に備へまた數日間掘りては進み〳〵だん〳〵恐しく物凄きまで深くなり今にも奈落の底に達し閻魔の內閣にでも突拔けもやせんと心ならずも思ふ程なりき斯くまで深く掘り下ぐれど銀塊も金塊も見當らばこそ疑はしきものさへも見出す事なければ又も數日間掘り下げる頃流石健康なる兩人の支體も勞れに勞れて氣力さへ衰へろの上猿野は少し山氣にでも感せしものか心地常ならず是には失望の力落しも持込みしならん最と不快なる容體にて有りしが或る岩鼻に腰打掛け暫く茲に休息する內四邊に散りたる岩石の一片を拾ひ取

り用意あしたる鐵槌取出し打砕き
〳〵落袋より顯微鏡を探り出して
細に之を檢めつゝ捨ては拾ひ拾ひ
ては捨て嘗めては眺め透しては見
て有りしが頓て「是は」と大聲を發し

猿野「アー此石はコレ紛れも無き
石晶にて色は白く光澤あり
之を砕き見れば中に纖緯あ
り此纖緯の中には銀幷に阿摩呃阿等を含める事確なり
と云ひながら又も一ッの小切を手に取りて見是はコレ剝ぎ着せたる
如く上ワ側に薄く金を保て有るヨ。〳〵めたり〳〵ト思はぞ知らず大聲
を發し歡び滿面に溢れて見ゆると同時に益々探礦の念慮を堅くしろ



の後數日間掘れば掘る程益々多量の金塊を
見出しろの金蔓のいづ方まで貫くものにや
其量謀り知るべくもあらず加之のみならず
此金蔓の方向を考へるに殆ど東西に渉りて
伸び廣がりたるものゝ如くに見へたるにぞ
猿野は茲に感を起し

猿野「この金坑を首尾
よく穿ち去りたるろの
時は幾百萬噸の金塊を得ると同時に求め
ずして函根山一般に隧道を通じ得て瀛車
の軌道をも容易く鋪き得べくコレ一擧兩
天秤の儲け口天與の幸福にして所謂ゴッ

トが我手を借りて日本東海に横はる此嶮山を開拓せしむるものにあらずや下田何んと思はるゝか左は云へこの金礦を發見したるは我々兩人を以て最初とすれば他人に功を奪はれぬうの内に早く土地の縣廳に試み掘りを願ひ出礦山借區の規則を踏み今後は公に許可を得てこの礦山の大利益を我々二人で專有するころ肝心要の手續きならずや又一方には我々が最初この礦山を發見して姥子金山と付したる其名は後世簿記に留めて滅せざるべし何んと此上もなき名譽にはあらずや

と滿悅置く處なく鼻の高さは二タ子山も陰に隱れ慾の深さは湖水の水も及ばず見へたり

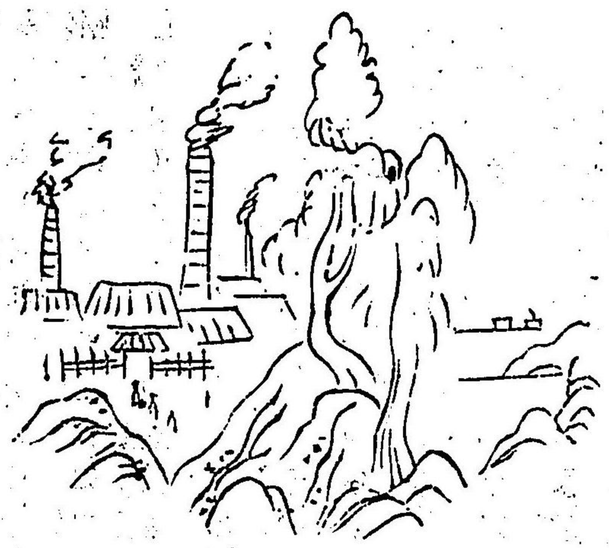
斯くて兩人は今回發見の礦山に充分信用を置き彌々政府へ試み掘りを願出る上は最早姑息なる小刀細工を以て爲し遂ぐべき事にもあらざれば今度ころ豫て話しのありたる伯父今田氏に資本金二三十萬圓も借入れの義依賴せばやと礦山發見のころの發端より事の次第を明細に述べ今にも棚の上より牡丹餅の落ち來らんばかりに書綴りたる長文の手紙を送りやりしに今田氏方にても殊の外この事業を贊成なし同人自ら思ふやう彼の猿野と云ふ男は可なり文字も讀め才氣もありなどこから見ても當世の人物に相違なく從前よりもいろ〳〵な新事業を起す事に熱心なりしも悲い哉實業に疎くして動すれば空論に渉るが多きは彼の男の爲に惜む處併し口前が達者であるから演說家になるは妨げ無きも實業家には些受取れ惡いが出京後は頻りと實業に奔走する由に聞き及びたれば隨分經驗にも富みし事ならん左ればこそ今回礦業資金借入れの件を申越せしも一應大丈夫らしくは聞ゆれど何分掛隔て居りては委細の事情も分らねば寧ろ此地より自身出張す

ると仕やうか但しは彼の地も創業の場所でもあり他より役員さへも募るくらゐの事であれば次第に依り役員にも成りて自ら監督する事にすればこの上の安心はない譯と是も同じく慾の山に栖む古狸にてありければ何層倍かの利益をば見る積りでまづ此處五萬圓程を爲替に振出して猿野の方へ送りける

此金を得て姥子にある兩人は前後左右皆金になる事件のみにて取圍まれ今や福分の幸先は我身の上に向て來たりと心に信ぜ是まで數年間出逢ひたる諸〳〵の失敗は只一場の夢と消え煙となりて跡形も殘さずと道は困苦せしものゝ果てます〳〵後トの手段を考へ心利きたる人と見れば役員に擧げて人夫を支配せしめ或は會計或は庶務と課を分ち責任を定めて事務を取らせ日を追ひ整頓の運びを見るに付け俄分限の局長どのは日々役所に出張して採礦の斤量を檢め又は諸

掛りの勤惰を檢する位なる事務に止りて大分支体に猶豫を生じたれば是迄の慰勞旁一と先東京に至らんとは思ひしも創業の際なれば慰勞と云はんも榮曜に聞ゆるが夫には何んと名を附けんと頻りに考へ何と〳〵視察とか何と〳〵取調とか唱へたしと思へど宜い考へも附かず採礦用新製器械買入方出張と云ふて附なる名を設け右出京中役所には相當の代理人を撰みて事務を委ね又今回の起業に付き借入れたる數萬の金は爲替に組みて東京に廻し置き兩人は支度整へ東京さして出發なしぬ

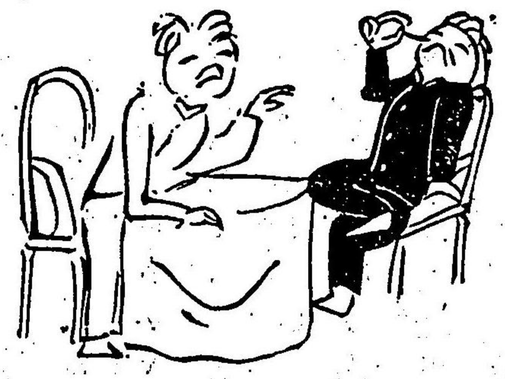
猿野は俄ま巨萬の富を身に重ねたるの



みならず一局部の長とも仰がれ何事も意の儘になる事なれば今は全國にも富みを以て己れに肩を比ぶべきものは恐くあるまじと迄安信し金銀などは裏店の隅掃溜の中にも溜て困るものゝ如くに見做し偶

世の中の不景氣なるを話すものがあれば斯る泰平富有の世にありて何とて左樣なる事のあらんと冷笑て信用せぬも富豪の身には常に有勝ちなる事ぞかし左りとて猿野は今多くの金銀が手元に積んで有ると云ふにもあらず只頼み難きを頼みとなして日ゞ遊興に耽るを見兼て下田は折ゝ諫めれど難きを捨て易きに就くは人性の常なるにや猿野は少しも耳に止めず打過ぎたり

却説兩人は出京以來芝口に旅館を定め下田と共に寓居はすれど以前兩人が東京に在りし時とは打て變た容体にて衣服は勿論器具調度に至るまでも悉皆贅澤を盡したれば誰が目に見ても惑ひもなき地方の紳士とは知られたり又自分にも充分紳士を氣取りては居りしも元來の濟泊なる性質は移り去らぬものと見へ日暮になれはいつも只壹人り運動と唱へて旅館を立出近傍の街ゝを徘徊せしがフト或商店に好き七寶の花瓶を見當り是が氣ゴ叶ひしと見へ



猿野「この花瓶は幾らだ

番頭「へー是は些上等品ゆゑお直段が張り升外にお安價い處がいろ〳〵御座い升

ト云はれ欲い事は欲いがと懐を打て相談したるは以前の事にて今は金錢も遣ひ切れずと思惟したる猿野の胸よはての言葉がギックリ當りナンノ此痩商人めがいゝ加減に八を見下げロと心の中に思ひつゝムッと仕ながら

猿野「ナニ安價いのを見せロとは云はねへ高價いとてその品は幾らするのだ

番頭「へゝゝ左樣で御座い升か是は極く働きまして壹對百五十圓がギリ〳〵で御座い升

と聞て猿野はヤッキとなり

猿野「チー宜い〳〵そんなら夫を壹對買ひませう

と落袋より百圓紙幣二枚を取出し釣りは入らぬと大袈裟に出掛け

猿野「チイ小僧さんろの花瓶を取てくんな

と何んの氣もなく受取りて歸り行く後ろ姿を見送る番頭亭主小僧お

かみさんまでおの〳〵顔を見合せて

番頭「何んと彼アマー堂したんだらう今の世界にあんな毛色のものは動物園にも見當らないやうだ洋服を着て居るから極好い官員かと思へば中々そんな御面相でもなし然て見るト彼アなんでもどつさり金のある國のマトロスでも有るだらうヨ

と旨い品評を下して番頭は元トの帳場にゞ居りけり猿野は好みに適ひし花瓶壹對を手に入れて旅館に戻り小座敷に只獨近頃珍しき閑暇

の體にて紙巻烟草を蒸らせながら思ふやう今回姥子金山發見の一條は實に近來意想外なる大當りにて是から先きの費用をば假令ひ十二分に引去りて見ても又採礦の惣額を僅か半減に減少せるとして見ても何れにしても殘る處は廣大無量なる金額にして我輩がいかに苦むとも生涯の中に迚も遣ひ果つべき見込みも附かずと考へたれば何かは以て堪るべき今迄積んだ困苦の未濟を取返へすのはこの時なりと或は酒宴に或は茶番と日を送りろの座持ちの善惡に依りて部下の人氣の向背を察するなど心を大事には用ひず、して小事にのみ氣を揉むも亦富人の通弊なるかされど新奇を好むが人心にて慣れたるものは面白からず花に遊び月に浮かるゝ尋常の娯樂は最早興なきものとなり左り迚眞面目に仕て居ては後トから湧て出るろの金の遣ひ道は無からんと是のみ苦勞にして居りしが何やら思出せしと見へ下田を呼

ひて云ひけるやう

猿野　ナントいつも宴會と云ひ懇親會と唱へ多くの賓客に接する事あるも相變らずの御面相ばかりで自ら持出す談話も紋切形に面白からず花に遊び月に浮かるゝ尋常の娯樂は最早興なきものとなり左り迚眞面目に仕て居ては後トから湧て出るろの金の遣ひ道は無からんと是のみ苦勞にして居りしが何やら思出せしと見へ下田を呼ひて云ひけるやう

下田　夫ア堂云ふ趣向歟ネ

猿野　ろの趣向と云ふは斯云ふ譯だ聞き給へよづ此節ならば午前三時か四時頃にてまだ夜も明け切らず薄暗き中に日本橋の橋詰に至りて待受け扨誰にても構はず向ふより第一ばんに遣て來るものを以て始とし第七ばん目に來るもの迄を限りとしての七人の住居姓名を聞糺し置き且ての人々に云ふに今日我輩方に於て貴殿に饗應を致さんと思へば堂か一日の閑暇を我輩に與へられぬか凡今一日だけ君方の業務に係る費用等は一切萬

事我輩方にて償ふべけれは枉げて我饗應に與り給へと懇切に示談に及ひ皆〻納得の上からはこの七人の人〻を上客として誘ひ來り充分に馳走をして遣ると云ふ趣向は堂だ何んと面白からうトやアないか

下田「ハヽヽヽ成程夫ア餘ッ程並みよりア風が變て居て至極妙なやうだが併し大勢呼集めて只醉はせたばかりぢやア當人の爲には宜からうが此方に取ては餘り興が有るとも思はれぬ堂せわざ〳〵呼立たくらねならろの人々に何か隱し藝でも遣らして見ちやア堂だ子

猿野「ウー夫ア妙〳〵。だが左う云ふ我々でさへ支體中を鉦大鼓で尋て見ても遊藝と云ふものア

只の一ッも貯へて居ぬやうなもんだから世間何處の人々やろの性體さへ分からぬものに必藝のあると云ふ保證は些と覺束ないが……

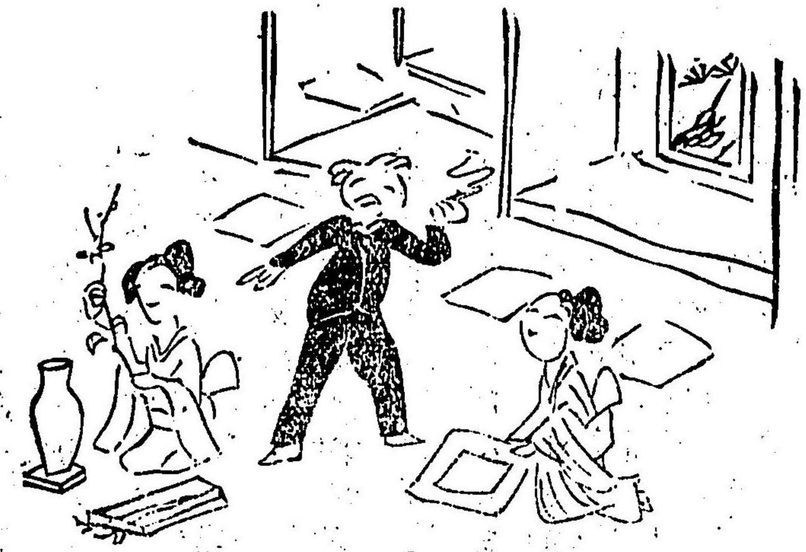
下田「ナアニ無いものは素より仕方なしサ隱し藝の有るもの丈けも左う極め給へサ

猿野「併し無藝大食家が多ほさうだ

下田「左う〳〵多數はうんなものかも知れぬが物は案外に出る事があるもんだからまア〳〵夫で遣て見給へ

猿野「うんなら左うする事に決しやう

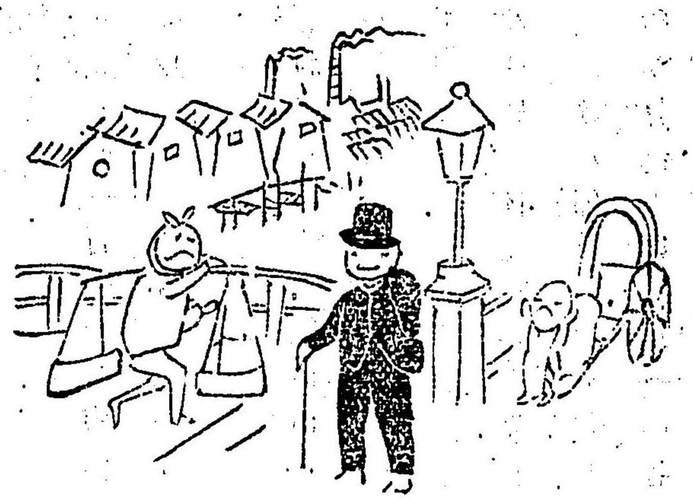
と次の日曜日に之を催ぞ事ト定めたり斯くて猿野の活潑なる性質は今も變らずこの相談の極りし後は自身其用意ヨ奔走し今度の催しには西洋館が宜からうか日本造りの座敷が宜いかといろ〳〵に考へて



は見しも來客の人種さへ福入煎餅の種と同じくどんなものが出て來るやらさつたり宛の無き譯ゆゑ矢張り普通の日本造りが宜しからうとて近所に手廣き座鋪を借り受け此處に華やかなる洋氈を鋪詰め床の間には豫て購ひ置きたる七寶燒の花瓶に多くの花を活けさして西洋風にあろらぬ座鋪の裝飾は充分行屆き料理の献立より酒に至る迄和洋の二種を備へたれば如何なる種類の客が入り來るも都て差支へなく拠待ち受けたる當日は未明より起出車の支度出來るや否や途中を急がせ日

本橋に至り橋臺の處にて車より下り待つこと凡そ二三十分間にして第一番に向ふの方より遣て來るものを誰ぞと見れば色も分らぬ手拭にて腮の下の方より腦天にて結びたるは逆さの頬冠りとでも云ふべきか胸の邊りに大きなる印の文字の見へたるは後ろ前に縫ひ直したる印半纏と見受られ喞筒の樹膠管然たる股引を穿ちて空盤臺を擔ぎたる樣は紛ひもなく四日市へ鹽物買ひ出しに行かんとする肴賣りの老爺とぞ見へたり

最前より首を延して來客遲しと待構へたる猿野はこのものを見るより慇懃に挨拶



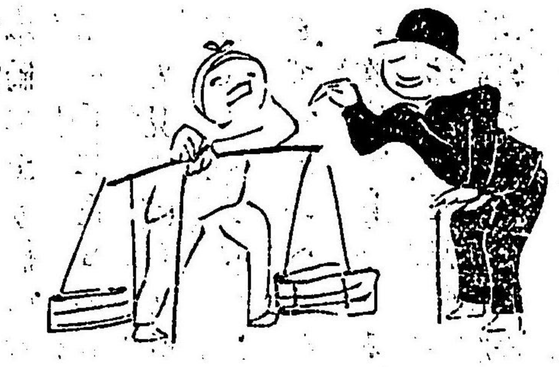
なし

猿野モシ〳〵貴殿に少し伺ひたい事が御座り升

看屋ハイ此處は日本橋で向ふが江戸橋此地のが一石橋で御座い升

貴殿は何處をお尋ねなさい升か私は少し耳が遠う御座いまし

て



猿野イヱ私は道をお尋ね申すのでは御座いません私の伺ひたいと云ふのは今日一日貴殿のお暇をお貰ひ申し我輩宅ヨ於て緩る〳〵一献さし上げたいと申す事です尤貴殿の今日一日丈げの立前となさる買出しの入用から賣上げの儲け額中食茶代草鞋料等に至るまで貴殿のお見込みに任かせ一切手前方にて相辨じろの上御歸りの節には車にてお宅

まで送らせさし上げ少しも御損耗は掛けませぬが右にて御承知下さらば只今より拙宅まで御同道下さいまし尤未だ後トのお客の連中が揃ひ升まで少々此處にお扣へ下さい

と云はれて看屋の老爺は半ば呆れて暫しは返答も出ざりしが一文入らずの御馳走と云ひその上御馳走の濟んだ曉にやア黒塗りの人力車でガラ〳〵とお歸りと來ちやア近頃申分の無い口だ我々なんぞアいつぞや河岸で鮪の天窓を五ッ六ッ買出した時ばかりは堂にも斯うにも頻返へしが付かなくてとほ〳〵鮪の天窓と相乘りでろの時始て人力車と云ふものに乘て歸つたがろの後いつが日にも車と云たら挽た事アあるが乘た事アねへのだ夫だのに態々己らの體一ッが廣々と車に乘て歸られるとア有難へ話だと内心に歡び勇みまづ頬冠りからソロ〳〵解き始め屁を卸しなどし腰を屈めて猿野に向ひ

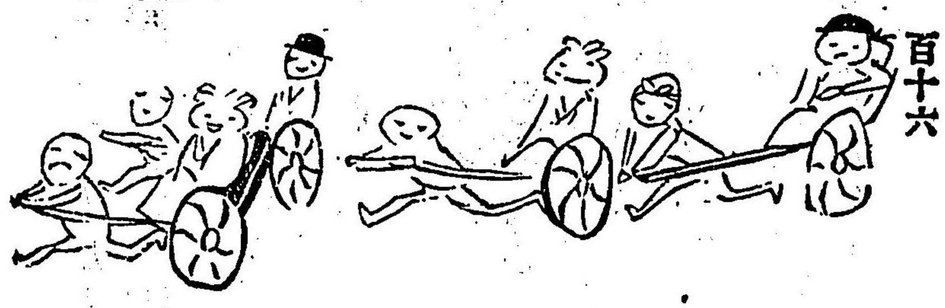
着星夫ぢやア旦那のお願通りと致しやしやう堂か勘定の處は間違へなく歸りの時分お願へ申しやす私ア道具が有りやすから皆さんのお邪ア に成らねへやうに此地の方に待て居りやすへ……

と猿野の下りたる人力車の陰に至りて盤臺に腰打ち掛けてゞ扣へたり

夫より第二番目に向ふの方より遣て來たるは書生體の若者なるが少し調子の上ワ釣りたる樣子を見れば堂やら根津の歸へりらしくも見受けられたり之に向ひても猿野は以前の通り懇に挨拶なし已れの催しなる今度の宴會の趣向を話し頻りに賴み込んで居る内に又もや後トより第三番目の人が遣て來たりての男は矢張り以前の書生の連中なるも途中大聲に詩を吟じながら歩行き來りし爲犬に追欠けられ逃げんとする途たんに下駄の前鼻緒を踏切り之を捻紙にて直して居りしゆゑ少し遲れて來たりしなり第四番目は職人體の男にて第五番目はお嬢らしき若き女なり猶ての外六番七番と追々に來掛るものを呼び止めつゝ猿野は以前の通り話し掛るにいづれも損の行ぬ旨い口なれば否むものとては壹人もなく猿野は願ひ通りとほ〳〵七人の客を生捕りたれば近邊にて七臺の人力車を命じての人々を乘せ已れは眞先きに立ち案内しつゝ七挺の車は芝口さしてゞ走り行きぬ

爾程に芝口の館にては客の來たるを今か〳〵と持構へ若き女供の中には好き男振りの客もやあらんと心を籠めて裝ひ飾りしに思ひも寄らず七人の客は鳥羽畫に寫せし七福人か左無く

ば鴨子假面の見本品かと思ふばかりおの〳〵一種特別なる風韻を備へたる御面相のみならずその扮裝さへ區々にて半纏股引の先生もあれば浴衣にヘコ帶のものもあり前垂れ掛けのお爨どんもあり角帶に矢立さしたる人も交り彼の話しに聞きたる假想舞會とやらも斯くやあらんかと心の内に可笑しさを忍び女供は玄關の兩側に居並びて叮嚀に是等の人々を出迎へ夫〳〵客の座にゞ案内なしたり肴屋の老爺とのは第一番の到着なればとて一番の上坐に着けられ褥の上に膝をモヂ〳〵して天窓を掻き鼻を堀りつして居りしが時々何か話し出す事を聞くに彼の持來りたる盤臺が殊の外氣に掛かるものと見へ頻りにろの所在を



女中に聞糺す

女中「貴殿のお持越しに成りました御盤臺は次の間の床の間に置て御座います御天秤棒も矢張りその脇に立掛けて御座い升から少しも御心配は御座いません

肴屋夫は有難う御座い升がアノ草鞋は何處へ置て下ださつたか彼は昨日歸りに買たのでまた雨にも逢はないのだから穿けやうと思ひます允岩谷の水撒夫が馬鹿に撒き過ぎるのでこの晴天の割りには堂も保ちません

女中「へー左やうで御座い升かお草鞋もろの掛

りの者が御座いまして皆叮嚀に仕舞ひ置きました

と夫々客相應なる思ひ〳〵の事を話し合ひ稍座敷も落付きし頃主人猿野は客の身形りを見合はせて羽織袴にて出來たり

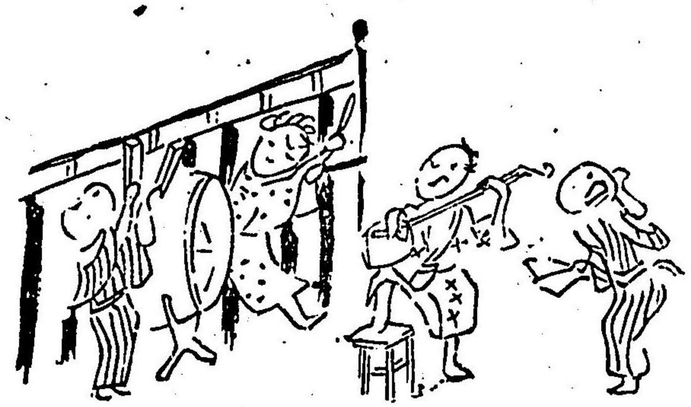
猿野「サテ皆さん御多忙の處能うこそお聞濟み下だされて御來臨ありしは我輩に於て無上の幸福と存じます併し是を云ふ御馳走もなけれど少しは用意致したもの

も御座れば御迷惑で無くば今日は緩りと充分召上つて下ださいまし

との言葉に續きて吸物膳盃洗お銚子と順々に繰り出だしまだ號砲の音さへ聞かぬ間に盃の取り遣りに立ちつ坐りつ客はろの扮裝の區〳〵なるにも似ず酒を飲むばかりは皆一樣に云ひ合せたる如く揃ひに揃ひて上戸ばかりなるを見れば世の中に眞の生下戸と唱へるものは不具なる人間程に見做さるゝもまた無理ならずと思はれたり

飲むこと三四時間とも覺しき頃には各自よき機嫌になり左も愉快氣に見へたるが猿野

は殊の外興に入り今こそ豫て思ひ設けたる例の趣向を言ひ出さんと客に向ひ



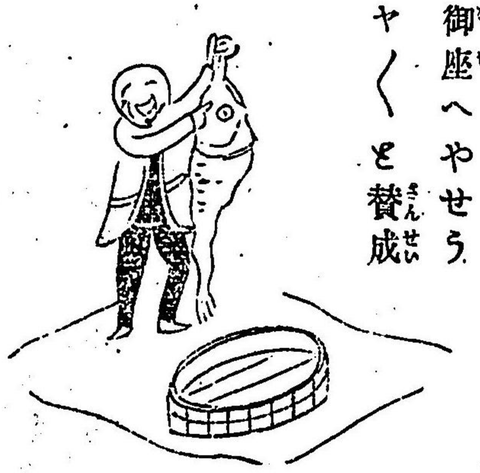
狂野時に皆さんに少し願ひたい事と申すは外でも有りません堂か御銘々何か隠し藝のあらんお方には何んなりと壹ッお發し下ださらぬか尤音曲入りのものなれば下座囃し方は申すに及ばずピヤノヴィチリン月琴笙篳篥その他衣裝鬘から銅羅柏子木に至るまで一切合切用意いたし之ありまた相方の入りますものは男優女優捕手馬の役までろの出方のもの供扣へ居れば少しも御差支への無きやう至しますサヽ堂か皆さん願ひ升〳〵

と急き立てられて酔の廻りたる客達にはチット來たりのお好みなれば皆々歡び勇んで何がな無類の銘案を出して座中の腮を惚外しに成し呉れんものと順の來たるを待掃へたり第一番は肴屋の老爺なるが是も昔の洒落ものゝよて少しは覺へのあるものと見へ眞ッ先に進み出豫て預け置きたる盤臺に鹽鱈壹本を載せて出し扨云ふやう

肴屋ハイ私ア年來東京の街々に魚と顔とを賣込んだ棒挺振りの壹人肴屋の万坊と云ふ者ですが今こつちの旦那のお勸めに依りやして一ッ口上茶番を遣ッ附けやすお題は下等社會と云ふのを戴きました其景物は有合せの鹽鱈壹本で御座へやす底で下等社會なんかんと滅法堅いやうですが是も鱈の肉の持前だか

ら柔くは有ません一體下等社會〳〵と安ッぽくも何んぞと云ふと世の中の引合ひに出されやすが此下等社會と云ふものを一ト口に云て見りやア何んの事アねへ人間社會を上中下三枚に卸したろの壹ばん惡い處を指して云ふ符帳ださうで御座へやすから云はゞ人間のアラで御座へやして上の方から見た日にやア社會のビリッ鱗で御座へやす(と云ひながら鰌の天窓を指さし天窓はてんなに大いにも拘はらずズット痩てげた此尻尾の處が調度下等社會と思ひやすがてへの下等と云ふ處アいづれも骨ばかりで迎も旨い味ひなんぞはサッパリないものに極て居りやす併し近頃の發明でてへの魚の皮肉を絞り上げて油を取りあれをお醫者さんたちが病人ゑ配劑し升ト所々方々からお禮が降るやうに遣て來る。處ろでこれを禮降るト唱へるさうで御座へやす隨分ろの効能は有りながらもてへの鹽の辛い世の中に毎日〳〵米が鰌ん薪が鰌んと鰌で日を暮すと云ふてへの我〳〵下等の有樣を行末は堂かとッく〳〵考へて見れば(ト云ひながら鰌の天窓に附たる繩を持てぶら提げ客の方に見せ)いづれ始終はてんなに腮を釣るすもので御座へやせうと遣て退ければ滿座の人皆手を拍ちてヤンヤ〳〵と賛成の聲は暫く鳴りも止まざりし

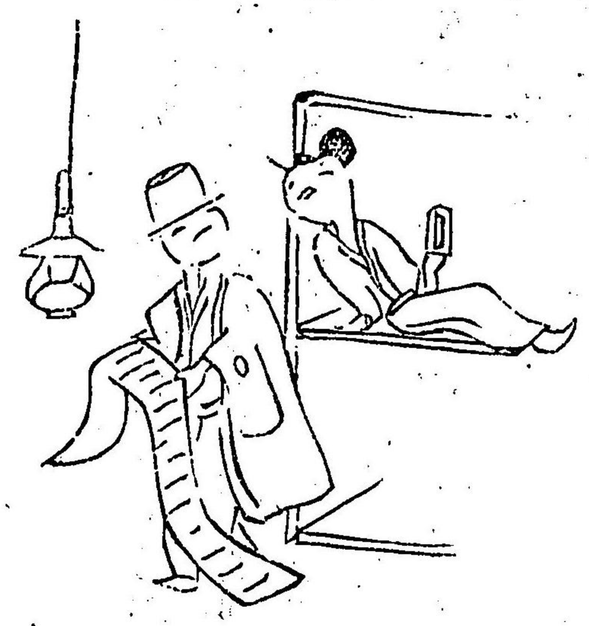
扨第二番目は書生さんの連中にて定めて堅くるしき洒落でも成すならんとの衆評なりしも案に相違し中々洒落ものゝ樣子併本年の試驗は落第せしとか聞きしが少し燒け腹も交りしならん繁々根津へも通ひ學問の餘



暇には鬱散の爲と號し遊藝の方は日頃勉強の効も顯はれ今日の請待に與るところ願ふてもなき宜い折りなれば我腕前を見せて呉んト妙な處へ力を入れ兩人は暫く何か打合せなどして居りしが頓て相談も極りしと見へまづ本舞臺の代りに座敷の正面なる戸棚の襖を殘らず取外させ戸棚の上の棚の鴨居には額など掛けて茶屋の奥二階に推へ壹人の男機嫌の毛にて拵へたる島田髷の鬘を着け茶屋女の狀態にて出で來たりて の戸棚の上の段に這上て一力のお輕るを氣取る他の壹人りは八字髭に帽子を戴きしが由良大じんを氣取り例の通り酒に酔ひたる狀態にて立出

男「ハテ生酔ひ本性違はずとはよく云ふたもの今日てゝの一力で遣た愉快は隨分惡くも無かつたが後トで書付を見りやア。ピッタリ仰天何か勘定違ひぢやアねへか夫とも己らの讀み違へか薄暗くつて能く見へなかつた幸ひてゝに釣り洋燈チー左うだ

と云ひながら男は釣りランプの下に イみ長々と書付を取出して目を白黒しながら讀んで居ると之を覗て見て居る棚の上の女はおかる氣取りで簪をパッタリ落す途たん雙方顔を見合はせ恟りしたる狀態にて



女「むなさんかへ

男「わかるカーチョン

第三番目に扣へたるは職人體の男なるが毛氈の上に進み出堂か夕暮の三味線を一ッ願ひ升ヨト云ふが否や樂屋に扣へたる別嬪壹人出現ましまし音締め清らかに彈き出すと職人どのは離斷れる程に首を振り立

夕暮替唄「珍頓爺父珍々々〳〵〳〵百に付き一を目安の所得割り出すは名譽と知りながら出されぬ我身のじれッたサアレ野良と呼ぶその猫の枕にかなはぬ痩せ腕

第四番目にッン出たるは一同目を注け居たる彼若き女なるが座中の鑑定には何んでも彼の娘ッ子は本郷邊の或る公

認下宿か何かの娘ト云ひたいが娘ゴしちやァ堂も少し品が無いから下婢にてもあるならんなど評し居りしに果して本郷邊なる公認下宿の召使ひなりと聞きしが斯る下宿の慣ひとて座敷は常に塾部屋同樣なる有樣にて日〻多くの書生が寄集り或は法律に或は政治に各ろの學科に應じたる討論駁論等を耳にしその上小學育ちの娘氣には世間はみんな斯んなものなりと知らず〳〵薫陶れいつしか一廉の理屈家となり人は見掛けに寄らぬものにて今日請待に與りても一番平生の持論を擔ぎ出して公衆の意見を問ふて見ん位の意氣込にてスラ〳〵と卓子の前に進出

女「サテ今日は謀らずも主人公の御馳走に出逢ひ醴に醉ふたるれ多福では無く清酒に醉ひ蕩けたる妾が一場の卓子演說をれ聞き下さい

と發端を述へるが否や皆〳〵是はと耳を立て膝を起し聞き居たるに女は咳一咳して說き出す

女「世帶の計畫如何と云ふ題にて妾が意見の有る處を一應述べたいと思ひます妾熟〳〵新世帶の繰廻し如何を考て見升に主人夫婦れさん權介と少數の家內でさへ上下の親睦を謀らずして一家を維持せんと仕ますは出來ない相談と云はざるを得ません左れは親睦一致して膝に迄も談合の權理を與へ忌憚なく各自得意の考案を持出さしめ其相談のよく

凝へ熟したる後始て世帶遣繰の方法ろの宜きを得るでは有りませんか獨り之のみならず勝手道具の使用に於るもまた之と同く各〳〵固有の用途あり數品集合一致して然して臺所の所作事を圓滑ならしむるでは有りませんか故に挾き臺所には同じ井の二ッ有らんよりはいつそ一ッの井と一ッの德利を備へたるに勝るはなしと考へます何故なれば井は井の用有り德利は別に德利の用途あるが故で御座います若之に引替へ慾に西洋の大世帶を氣取り百人前二百人前ト諸器具を一樣に揃へん事にのみ目を注け狹き臺所の內ゑ唯一部分同ト形同じ格好のものを數多く備へんと仕ますは丁度人にして己れと同癖あるものを撰みて備へんとするやうなもので有ります猶十箇の摺鉢或は二十箇の摺鉢を備へて只壹本の摺木無きときは何ん

の用にも立ぬと同じ事で有りませう（ヒヤ〳〵〳〵）茲に形の異りたる一本の摺木が有りまして始てこれに激動を與へ雷盈の名さへ備へて用を達そるで有りませう然るに摺鉢は土より產し摺木は木で出來夫〳〵性質の違ふ處より自然とろの爲す處も同じやうに行ぬとて一々これを跳ね除けて仕舞ふ時は滿天下日〻の味噌を如何に摺り立てませうぞ果してろの好結果を見るものなるや我〳〵は之を知らぞ唯妾は大小方圓は扨置き八百屋の椽の下では有りませんが長いも短いも摺鉢も摺木もその形ろの性質產所をも攪ばざるのみならず却て五行五体列種類の色〻雜多打交た方を妾は好むものて有ります故に向ふ三軒兩隣に於て許さん限りは決して置しとして之を厭ひませぬから成るべく充分に摺り立充分に能く揑ッ返へして飽くまて

も味噌の膚の濃にならん事を要し然して後貴賤上下れしなべて共に〳〵旨き味噌汁を吸はん事を今より懇望そる處で有ります（ヒヤ〳〵〳〵）拍手の音（パタ〳〵）

漸くにして滿座の人聲鎭りしと思ふ頃次の間より下婢が一封の手紙を持來たり別配達の郵便が參りましたと猿野の前へさし出すにぞ猿野は之を受取りて表書を見るに差出許は姥子の役所にて大至急要用と脇付あり急ぎて封を開き見

「エー何ン〳〵局中に於て昨今稀有なる說を爲すものあり之が爲衆人疑惑を惹起し若しての儘に捨置候得ば由〻しき大事にも立至るべくと局中一同痛心罷在候右に付局長には是非とも大至急御歸山無之ては相叶ひ申さず卽刻御發途相成候樣致し度尤御歸山之節府下にて然るべき分析家一名御屆入れ御同

伴相成候樣いたし度委細は御面晤に讓る早々不具

ホヽー何事が起たか多き坑夫の中には隨分不良な徒もありて賃銀などの事に付てはエテ暴動などを起す事あるは何れの礦山にも有り勝なる事今回の事件も多分は是等の一件ならん併し夫にしては分析家の入用もあるまいに是アどの道一ト度立歸らずば成るまい

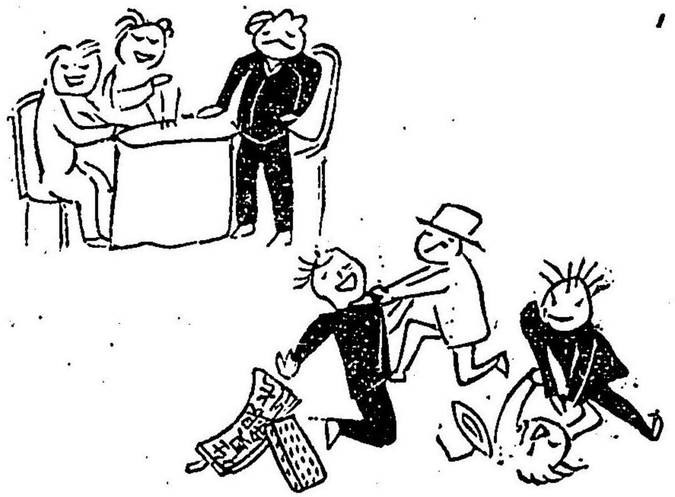
と猿野は彌々歸山と心を決し一座の客にも止むを得ざる用向の出來たる由を告げ遺憾ながらも今日の宴會はまづ是迄に致さんとて猶も一同に充分なる饗應をなして後夫々豫て命じ置きたる人力車に醉ひ潰れたる人々を乘らせろの區〳〵へ送り返しぬ猿野は惜しき宴會を半途に解散したるは少しく失望を感じたれども

金山の事件と聞きては氣も安からず一日も早く歸山せばやと取敢へず府下の知己の中に分析家もあるなれば早速其者方へ出向きて示談の上ろの人を雇ふ事に定め之を連れて猿野下田の兩人は再び東京を出發なしたり

姥子の方にては局長の歸り遲しと待構へ出迎ふ人の有るにも拘はら丸坑夫等は大勢事務所へ押掛けて賃銀の居催促やら强談やらろの混雜云はん方なく見へたるにぞ猿野

は取敢へず代理人を身近く呼寄せ事の模様を聞糺せば

代理人「去れば今回至急便を以て御歸山の儀を申し上たは餘の儀にも候はず此頃誰云ふとなく稀有なる説立ちて夫が爲人心穩ならず昨今の模様にては今にも瓦解に及ばんず有樣に立至り如何にとも致せん術なく至急何とか御所分なくば一山の坑夫等立處に暴動を爲さんも謀り難し



と顏色變へて述立るにぞ猿野は驚き

猿野「扨は又如何なる事にて有りしか堂云ふ原因に依るものにや

代理人「今度の事件の原因と申そは抑もて

の金山の最初局長と下田君の兩人が非常の勉强と苦心とに依りて發見されしてのかた遂に今日の盛大を爲そに至りしにも拘らず何んぞ謀らん最初より採掘の礦石は積んで山の如くなるも皆コレ尋常の石にして之には寸毫も金銀なとを含み居らずとの説一ト度起りしより坑夫等は勿論此業に從事し居る局員に至るまでも都て廢業の體に至り併のみならず前日の賃銀作料等を我先に受取らんものと只今御覽の通り代るゝ事務所へ入來りて强談を仕掛け之を拒めば一山の人心卽座に破裂せんも謀られざれば止むを得ず手配りを爲し屆く丈けは賃銀を拂ひ渡さん事を許諾し是迄は無難に打過ぎ夫

は取敢へず代理人を身近く呼寄せ事の模様を聞糺せば

代理人「去れば今回至急便を以て御歸山の儀を申し上たは餘の儀にも候はず此頃誰云ふとなく稀有なる説立ちて夫が爲人心穩ならず昨今の模様にては今にも瓦解に及ばんず有樣に立至り如何にともせん術なく至急何とか御所分なくば一山の坑夫等立處に暴動を爲さんも謀り難し

と顏色變へて述立るにゞ猿野は驚き

猿野「扨は又如何なる事にて有りしか堂云ふ原因に依るものにや

代理人「今度の事件の原因と申さは抑もこの金山の最初局長と下田君の兩人が非常の勉强と苦心とに依りて發見されしてのかた遂に今日の盛大を爲さに至りしにも拘らず何んぞ謀らん最初より採掘の礦石は積んで山の如くなるも皆コレ尋常の石にして之には寸毫も金銀なとを含み居らずとの説一ト度起りしより坑夫等は勿論此業に從事し居る局員に至るまでも都て廢業の體に至り併のみならず前日の賃銀作料等を我先に受取らんものと只今御覽の通り代るゝ事務所へ入來りて强談を仕掛けこれ之を拒めば一山の人心卽座に破裂せんも謀られざれば止むを得ず手配りを爲し屆く丈けは賃銀を拂ひ渡さん事を許諾し是迄は無難に打過ぎ夫

々勘定最中の處で御座る

と聞て猿野は持たる革函をパタと落し顔色宛然土の如く眼目逆釣りて頗狂人かと疑ふばかりにて且怒り且疑ひ凡三四十分間默然として彳みたるが斯くては果トと今度同伴なしたる分析家蘆戸酸醋氏を呼び自身立會ひて是迄掘取りたる礦石の分析を乞ひたるに果して純粹のコールヅにして少しも金銀を含み居らぞとの事に猿野はいよ〳〵呆れ果大地ユ堂と腰を抜かしアーと一ト聲溜息を吐くよと見へしが未ダも心殘りの有りしと見へ腮を振りてゞ指圖なし其處の置場此處の倉庫ユ貯へたる彼の礦石をも取出せよとて有らゆる貯蓄の礦石を取寄せつゝ部類を分ちて試驗をなさしむるにいづれも皆同質同種類の石なる事に確定したれば納屋も倉庫もあらばこそ皆石片にて充滿したり

猿野は是迄數度の失敗に出逢ひし中にも今回の失敗には實に途方に暮れたるも幸ひに好き後ロ楯ありて只管豪商の今田氏に依賴してこの礦山の大穴は一時無難に結局を告げたるも少小なる金額にてあらぬが故に頓の猿野も耳心に恥ぢ我身の未熟に起りし事と痛く憂苦に沈みしも若し我身にして學術にも達し實業にも明るくして雙方熟練の上に有りせば斯る失敗を招く事もあらざりけんと我身で我身の未熟を責むれば寢食するの暇さへ惜しまれ乞ての失敗を取返へさん此儘にして止むものならんと是より猿野は或專門の學士に就き猶も目指す學科を專修せん事を思立ち學術と實業とを考索驗究して日も尙足らずとするは末賴母しくぞ見へたりけり

著者曰猿野千枝と稱するもの我國の戸籍簿に有りや無しや是全く三本足らぬ猿の戲述に成るものなれど世間往々この猿野の如

き數回の失敗を出逢ふものあるを見る然れども未タ能く猿野の如く精神撓まず飽く迄もろの目的を貫かんとするものあるを聞かず嗚呼是等の人にして益々勤勉倦むこと無んば豈大成の期を見猿はとあら猿べき猿ときにてそ宜く猿野の姓を改め馬井千枝と稱すべし實に

Difficultys give way to diligence.

艱難は勤勉の道を開く

と蓋し是等の事を云ふ歟

滑稽小說雲の下手人終

滑稽小說雲廼下手人跋

近頃小說之出日多一日而或人情或政治至滑稽小說則寥々如明治今日無一人之一九半人之鯉丈者社友喜望翁著一書名曰雲廼下手人蓋滑稽洒落出於人意外者則翁之專賣特許而其文章縷々密於蛛網其意匠架空奇於發條梯一本毛錐能穿滑稽之穴鑛山坑夫亦應投鋤降參也則全編骨子也者自稱紳士企調子外人並外之大山結局目的胸算盡外之珍談而係奇々妙々之脚色然則讀之者雖欲使顯不外豈可得哉而有不外者二何也卽是欲博看客喝采著者之目的與欲得發兌利益出版人之胸算耳

於是乎欣然援筆識。

于時明治二十年十二月中浣。於暗雲虛月樓上罪丸火鉢

否暖室爐暖處

海嚢狂夫

明治二十年十　月廿七日版權免許
同　年十一月廿八日改題御屆
同　年十二月　出版

定價金三拾錢

著者　靜岡縣士族　渡邊望　小石川區水道町四十九番地

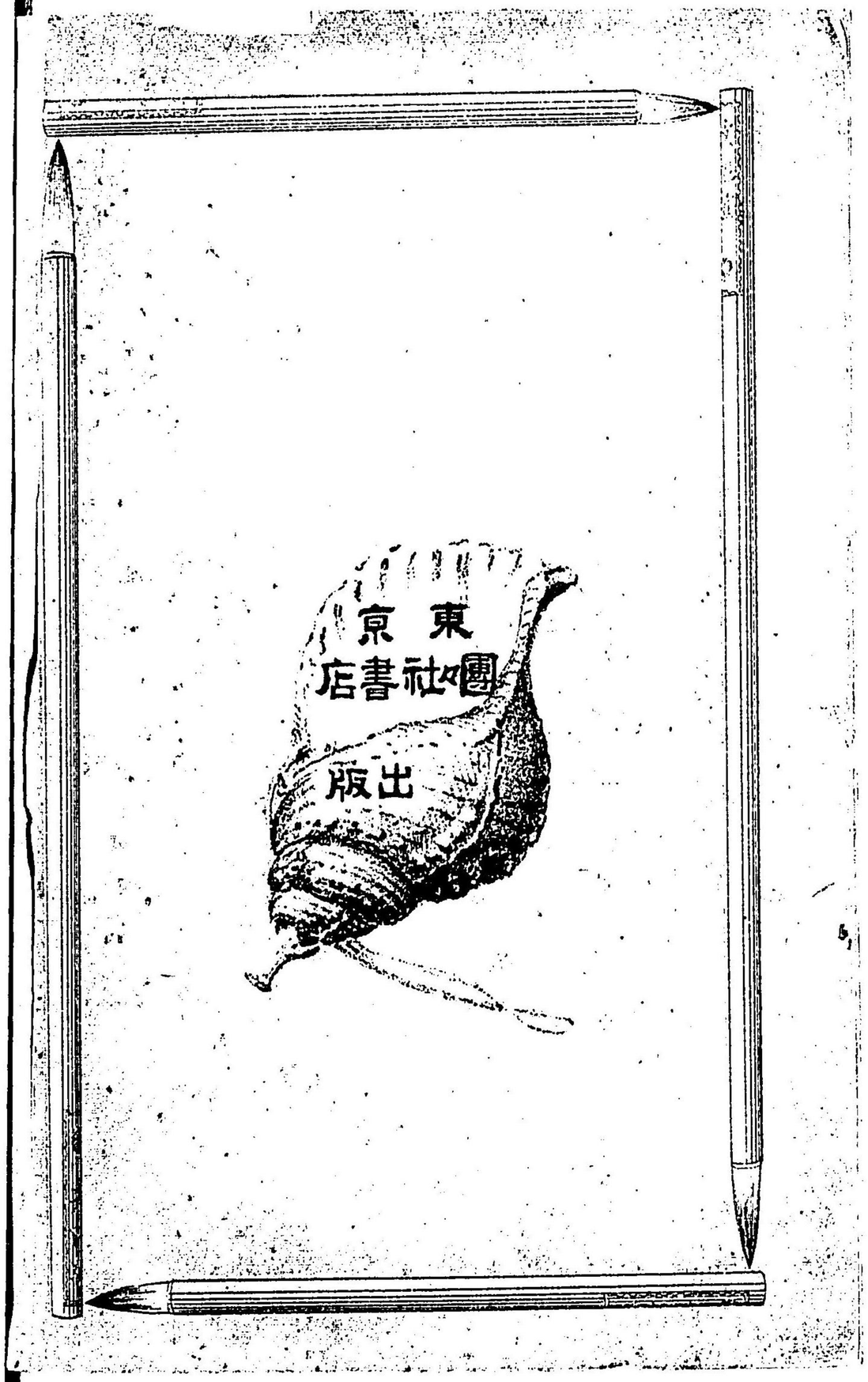
出版人　岡山縣平民　岡初平　神田區雉子町卅二番地寄留

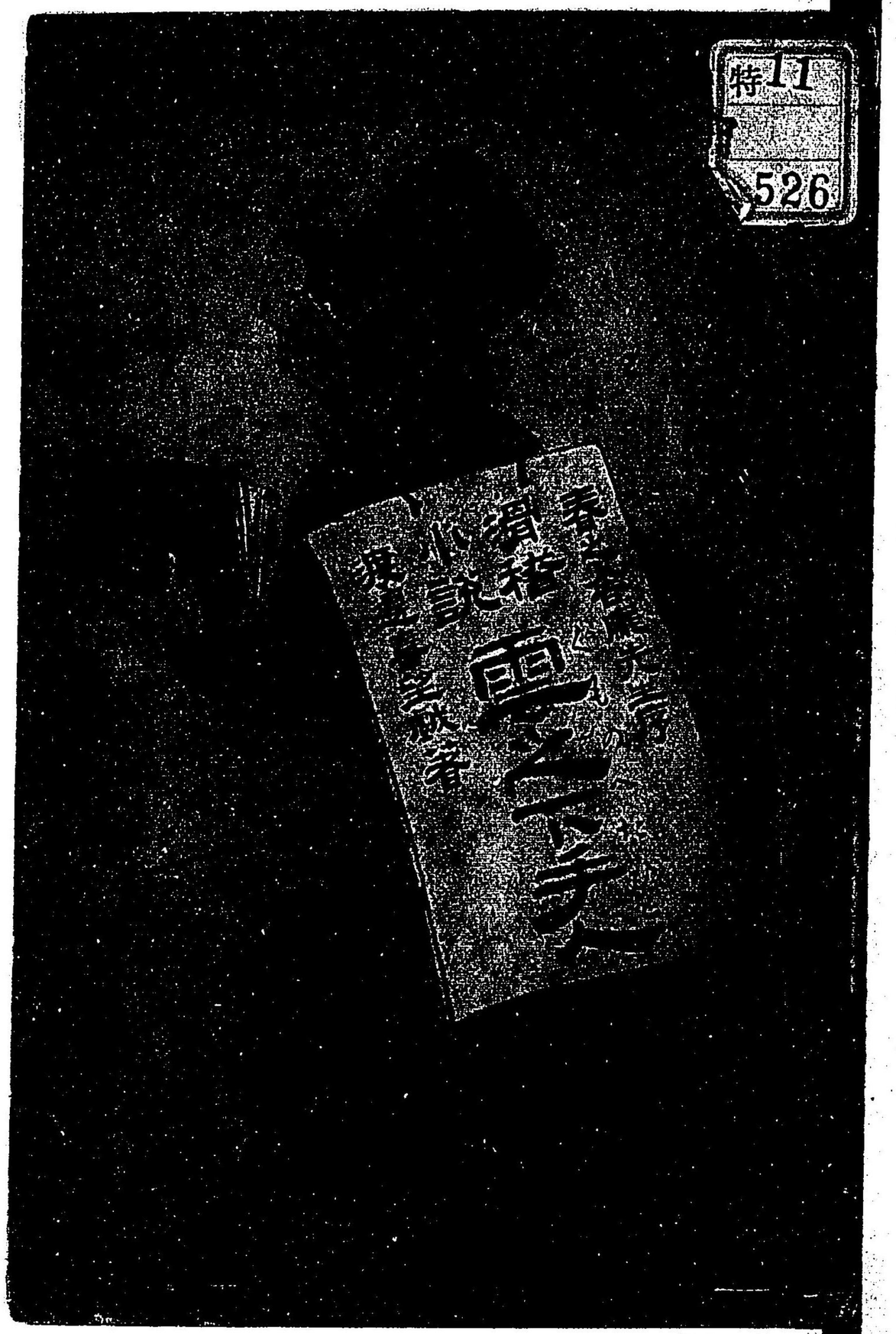
發兌元　神田區雉子町卅二番地　團々社書店

大賣捌所

東京日本橋區橘町貳丁目　鶴聲社
仝日本橋區大傳馬町貳丁目　佐藤乙三郎
大阪備後町四丁目　村彦助
西京寺町通松原下ル　改進堂
西京河原町　大黑屋書舗
西京東洞院三條上ル　村上勘兵衛
横濱住吉町　角田屋貞店
神戸元町五丁目　船井書店
加州金澤尾張町　牧野作平
陸中仙臺大町　木村文助
尾州名古屋本町　片野四郎
筑前福岡町　林東助
勢州津東町　淺野斧助
越前福井桑町　溝口東堂
信州飯田池田町　精華書店
信州松本　琴水堂

常陸下妻　鯨井茂三郎
上州高崎　菊屋源作
駿河靜岡　廣瀨市藏
尾州名古屋本町　川瀨代助
江州彦根　新立眞々舍
千葉本町
甲州甲府　内藤傳右衛門
青森大町　柿崎忠兵衛
三州豐橋　高須又六
武州鴻巣驛　長島爲一郎
仝川越　明澤宗文堂
江州大津
江州大津菱江町　島林專次郎
紀州和歌山　津田源兵衛
新潟古町二番町　井筒駒吉


東京
團體社書店
出版



091636-000-1

特11-526

雲の下手人

自他楽坊／著

M20

DBO-0089